大橋町東遺跡第1次～第6次発掘調査報告書

2015

神戸市教育委員会

大橋町東遺跡第1次～第6次発掘調査報告書

2015

神戸市教育委員会

序

神戸市長田区は平成７年１月17日の阪神・淡路大震災で大きな被害を被った地域の一つです。

しかし、地域住民をはじめ多くの人々の努力と協力によって、着実に新しい歩みを記し始めています。

神戸市もこの地域を震災復興事業の一環として、新長田駅南地区の再開発を進めてきました。

今回ここに報告する大橋町東遺跡も、この事業に伴い平成19年度に新たに発見された遺跡です。

この報告が神戸の歴史を知る上で、何らかの一助になれば幸いと思います。

平成27年３月

神戸市教育委員会

例言

1．本書は神戸市長田区大橋町３丁目において平成20・21・24～26年度に亘り実施した大橋町東遺跡第１次～第６次調査の発掘調査報告書である。
2．調査は新長田駅南地区震災復興第二種市街地再開発事業（大橋３）に伴い、神戸市教育委員会が実施した。
3．現地調査は既存建物解体等の事情により６回に分け、実施した。出土遺物の整理作業は、写真撮影も含め神戸市埋蔵文化財センターで行った。
4．調査面積は計約3,941㎡（各調査区２面、延べ面積約7,882㎡。第１次調査区約1,250㎡、第２次調査区約450㎡、第３次調査区約370㎡、第４－１次調査区約660㎡、第４－２次調査区約290㎡、第４－３次調査区約250㎡、第５次調査区約511㎡、第６次調査区160㎡）である。
5．現地での調査担当は教育委員会文化財課の内藤俊哉・池田毅・阿部功・西岡巧次・谷正俊・須藤宏・関野豊・中谷正・佐藤麻子・黒田恭正・石島三和である。
6．本書の写真図版のうち遺構写真は各現場担当者が、遺物写真は株式会社クレアチオが行った。
7．本書の記述は各担当者の原稿を基に黒田が編集した。遺物実測及びトレースは黒田が行った。第Ⅴ章の文化財科学による調査の内、第１節は当文化財課中村大介が執筆し、第２節はパリノ・サーヴェイ株式会社の報告による。
8．本書に使用した標高は東京湾平均海水面（T.P.）、方位座標は平面直角座標系第Ⅴ系（世界測地系）である。
9．本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の１地形図「神戸首部」及び「神戸南部」、神戸市発行の2,500分の１地形図「大橋・長田港」を使用した。
10．現地調査に当たっては、神戸市都市計画総局新長田駅南再開発事務所の御協力を得た。
11．発掘調査で出土した遺物及び図面・写真などの記録は、神戸市教育委員会が保管している。

本文目次

Ⅰ．はじめに …… 1
1．調査に至る経緯 …… 1
2．調査組織 …… 1

Ⅱ．遺跡の位置と環境 …… 5

Ⅲ．調査地区割 …… 11

Ⅳ．遺構と遺物 …… 12
1．縄文時代～弥生時代の遺構と遺物 …… 13
（1）縄文時代の遺構 …… 13
（2）縄文時代の遺物 …… 13
（3）弥生時代中期の遺構 …… 14
（4）弥生時代後期以降の遺物 …… 15
（5）弥生時代中期の遺物 …… 17
（6）弥生時代後期以降の遺物 …… 19

2．古墳時代の遺構と遺物 …… 21
（1）古墳時代の遺構 …… 21
（2）古墳時代の遺物 …… 23

3．平安時代の遺構と遺物 …… 26
（1）平安時代の遺構 …… 29
（2）平安時代の遺物 …… 33

4．その他の遺物 …… 42

Ⅴ．文化財科学による調査 …… 44
1．大橋町東遺跡第5次調査出土の曲物に使用された樹種 …… 44
2．大橋町東遺跡第5次調査に伴う古環境分析作業業務報告 …… 45

Ⅵ．まとめ …… 54

挿図目次

第１図　大橋町東遺跡位置図 …… 5
第２図　周辺遺跡位置図 …… 6
第３図　調査地位置図 …… 11
第４図　調査地区割り図 …… 11
第５図　縄文時代～古墳時代遺構面平面図 …… 12
第６図　４－２-SP201平面・断面図 …… 13
第７図　縄文時代遺物実測図 …… 14
第８図　４－２-NR201平面・土層断面図 …… 15
第９図　１-SB02平面・土層断面図 …… 16
第10図　５-SK201平面・土層断面図 …… 7
第11図　弥生時代遺物実測図（１） …… 18
第12図　弥生時代遺物実測図（２） …… 20
第13図　１-SB01平面・土層断面図 …… 22
第14図　４－２-SE201平面・土層断面図 …… 23
第15図　２-SK201平面・断面図 …… 23
第16図　古墳時代遺物実測図 …… 24
第17図　平安時代遺構面平面図（上層） …… 26
第18図　平安時代遺構面平面図（下層） …… 27
第19図　４－１-SB01・SB02平面・土層断面図 …… 28
第20図　４－３-SK101平面・断面図 …… 29
第21図　５-SB01平面・土層断面図 …… 30
第22図　１-SP03平面・土層断面図 …… 31
第23図　２-SE01平面・土層断面図 …… 31
第24図　５-SE101平面・土層断面図 …… 32
第25図　５-SE102平面・土層断面図 …… 34
第26図　平安時代遺物実測図 …… 35
第27図　５-SE102出土遺物実測図 …… 38
第28図　５-SP112・SD202出土遺物実測図 …… 40
第29図　包含層等出土遺物実測図 …… 41
第30図　旧耕土層等出土遺物実測図 …… 42
第31図　曲物材断面顕微鏡写真 …… 44
第32図　５-SE102断面図及び分析試料採取位置 …… 46
第33図　花粉化石群集ダイヤグラム …… 47
第34図　珪藻化石写真 …… 52
第35図　花粉化石写真 …… 53

表目次

表１　珪藻分析結果 ……47
表２　花粉分析結果 ……48

写真図版目次

図版１　第１次調査区
第１次調査区北半、第１遺構面（南から）　同南半、第２遺構面（北から）
同北半、第２遺構面（南から）　同、SB02（南から）　同、SB02内土坑（西から）
同、SB01（南から）　同、竈（南から）
図版２　第２次調査区
第２次調査区、第１遺構面（南から）　同、第１遺構面（東から）
同、SE01（東から）　同、第２遺構面（東から）　同、SK201（西から）
図版３　第３次調査区
第３次調査区、第１遺構面（東から）　同、第２遺構面（北から）
図版４　第４－１次調査区
第４－１次調査区（南から）　同、（西から）　同、南西部、（東から）
図版５　第４－２次調査区
第４－２次調査区、第１遺構面（東から）　同、第２遺構面（東から）
同、SP201（東から）　同、SE201（東から）　同、NR201（西から）
図版６　第４－３次調査区
第４－３次調査区、第１遺構面（西から）　第４－３次調査区、第２遺構面（西から）
同、SK101（南から）
図版７　第５次調査区
第５次調査区南半、第１遺構面（西から）　同北半、第１遺構面（西から）
同南半、第２遺構面（西から）　同、SE101（北から）
同北半、第２遺構面（西から）　同、水溜転用曲物（北から）
図版８　第５次・第６次調査区
第５次調査区、SE102（北から）　同、水溜転用曲物（東から）
同、遺物出土状態（北から）
第６次調査区、第１遺構面（南から）　同、第２遺構面（南から）
図版９　縄文土器・サヌカイト製石器
縄文土器　4-2-SP201出土土器　サヌカイト製石器類
図版10　第１次調査区出土遺物
1-SP21出土土器　1-SB01出土遺物

図版11　第２次・第4-2・3次調査区出土遺物
2-SK201出土須恵器　2-SK201出土土師器甕　4-2-耕作溝出土滑石製紡錘車
4-3-SK101出土須恵器塊　　同、出土土師器塊
図版12　第１次・第５次調査区出土遺物
1-SP03出土須恵器塊　2-SE101出土黒色土器塊　93～104：5-SE102出土瓦器類
105：同、出土土師器小皿
図版13　第５次、SE102出土遺物
5-SE102出土遺物
図版14　第２次・第５次調査区出土遺物
5-SE102出土水溜転用曲物　5-SP112出土棒状土錘　　耐火煉瓦
5-SD202出土飯蛸壺

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

大橋町東遺跡が位置する地域は、古くから市街地として発展してきた場所であるが、平成7年１月17日の阪神・淡路大震災により、大きな被害を蒙った。この震災後に、JR新長田駅を中心に復興区画整理事業の計画がおこり、周知遺跡の発掘調査と並行し、その周辺地域に関して試掘調査を実施した。平成15年には当該遺跡の西側で大橋町遺跡が新たに発見され、平成16年度に第１次調査、平成18年度には第２次調査を実施した。また当遺跡の北側に位置する若松町遺跡でも平成19・20・22・23年度に現地調査を実施している。

大橋町東遺跡は平成19年度に新しく発見された遺跡で、前記した大橋町遺跡の東に当たることから、大橋町東遺跡と命名した。平成20年度に第１次調査を開始し、平成20年度に第２次調査、平成24年度に第３・４次調査、平成25年度に第５次調査、そして平成26年度の第６次調査を実施し、この地区の新長田駅南地区再開発事業に伴う発掘調査は終了した。

2．調査組織

第１次調査から第６次調査の調査期間及び調査組織は以下のとおりである。

第１次調査　平成20年４月14日～平成21年３月31日
第２次調査　平成21年11月13日～平成22年２月25日
第３次調査　平成24年４月２日～平成24年５月18日
第４次調査　４－１次　平成24年５月29日～平成24年７月18日
　　４－２次　平成24年９月21日～平成24年10月19日
　　４－３次　平成24年12月26日～平成25年１月29日
第５次調査　平成25年９月９日～平成25年12月20日
第６次調査　平成26年６月17日～平成26年６月27日

＜平成20年度＞

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）
檀上重光　前神戸女子短期大学教授
工楽善通　大阪府立狭山池博物館館長
和田晴吾　立命館大学文学部教授

教育長	橋口秀志
社会教育部長	黒住章久
参事（文化財課長事務取扱）	柏木一孝
主幹（埋蔵文化財指導係長事務取扱）	丸山潔
事務担当学芸員	谷正俊　斎木巌
	松林宏典　井尻格
埋蔵文化財調査係長	千種浩
文化財課主査	安田滋

事務担当学芸員	阿部敬生　中谷正
現場担当学芸員	内藤俊哉
保存科学担当学芸員	中村大介
主幹（埋蔵文化財センター所長事務取扱）	渡辺伸行
文化財課主査	丹治康明
担当学芸員	富山直人　池田毅

＜平成21年度＞

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）	
工楽善通　大阪府立狭山池博物館館長	
和田晴吾　立命館大学文学部教授	
教育長	橋口秀志
社会教育部長	大寺直秀
参事（文化財課長事務取扱）	柏木一孝
埋蔵文化財指導係長	丸山潔
事務担当学芸員	谷正俊　東喜代秀
	松林宏典
埋蔵文化財調査係長	千種浩
文化財課主査	安田滋　斎木巌
事務担当学芸員	中谷正
現場担当学芸員	池田毅・阿部功
保存科学担当学芸員	中村大介
主幹（埋蔵文化財センター所長事務取扱）	渡辺伸行
文化財課主査	丹治康明
担当学芸員	富山直人　山口英正

＜平成24年度＞

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）	
工楽善通　大阪府立狭山池博物館館長	
和田晴吾　立命館大学文学部教授	
教育長	永井秀憲
社会教育部長	東野展也
文化財担当部長（文化財課長事務取扱）	安達宏二
埋蔵文化財担当課長（埋蔵文化財係長事務取扱）	千種浩
文化財専門役	丸山潔
文化財担当係長	丹治康明　安田滋　斎木巌
事務担当学芸員	佐伯二郎　井尻格　中谷正
	小林さやか

現場担当学芸員	西岡巧次　谷正俊　須藤宏
	関野豊　中谷正　佐藤麻子
保存科学担当学芸員	中村大介
遺物整理担当学芸員	池田毅　内藤俊哉
	藤井太郎　阿部功

＜平成25年度＞

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）

工楽善通　大阪府立狭山池博物館館長

和田晴吾　立命館大学文学部教授（平成25年７月14日まで）

菱田哲郎　京都府立大学文学部教授（平成25年７月15日から）

教育長	雪村新之助
社会教育部長	東野展也
文化財担当部長（文化財課長事務取扱）	安達宏二
埋蔵文化財担当課長（埋蔵文化財係長事務取扱）	千種浩
文化財専門役	丸山潔
担当係長	丹治康明　前田佳久
埋蔵文化財センター担当係長	斎木巌
事務担当学芸員	井尻格　中谷正
現場担当学芸員	黒田恭正
保存科学担当学芸員	中村大介
遺物整理担当学芸員	山口英正　藤井太郎
	阿部功

＜平成26年度＞

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）

工楽善通　大阪府立狭山池博物館館長

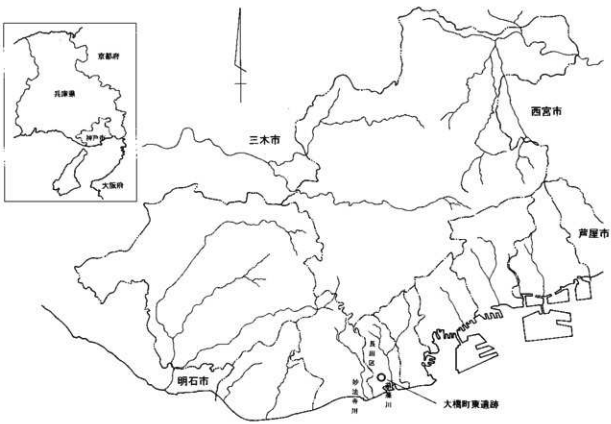
菱田哲郎　京都府立大学文学部教授

教育長	雪村新之助
社会教育部長	東野展也
文化財担当部長（文化財課長事務取扱）	安達宏二
埋蔵文化財担当課長（埋蔵文化財係長事務取扱）	千種浩
文化財専門役	丸山潔
担当係長	前田佳久
埋蔵文化財センター担当係長	安田滋
現場担当係長	斎木巌
事務担当学芸員	井尻格　山口英正
	中村大介

現場担当学芸員	石島三和
遺物整理担当学芸員	口野博史　黒田恭正
	佐伯二郎　阿部功

Ⅱ．遺跡の位置と環境

大橋町東遺跡は六甲山南麓部に東西に伸びる神戸市街地の西端近くに位置し、六甲山系から南流する苅藻川、妙法寺川が形成した標高５～６ｍの沖積地上に立地している。



第１図　大橋町東遺跡位置図

周辺で最古の遺跡は会下山遺跡で、サヌカイト製国府型ナイフ形石器が採集されている。

縄文時代の遺跡としては、中期の土器片が名倉遺跡で採集され、楠・荒田町遺跡第16次調査でも土器片が少量出土している。後期では楠・荒田町遺跡第６次調査で土坑を、楠・荒田町遺跡第38次調査で、後期中頃の土坑から土器類と共にサヌカイト製石鏃が出土した。楠・荒田町遺跡第16次調査では、晩期の貯蔵穴を計４基検出し、アベマキ果実、アカガシ果実、イチイガシ果実、トチノキ果皮や黒色磨研浅鉢などが出土した。大橋町遺跡第１次調査では縄文時代晩期（滋賀里Ⅳ期・長原期）の土器片が出土している。長田神社境内遺跡では縄文時代晩期（滋賀里Ⅳ期）の土器片、二葉町遺跡でも縄文時代晩期（長原期）の深鉢片を確認している。

弥生時代前期では大開遺跡で前期前半の環濠を伴う集落址を調査し、竪穴建物や貯蔵穴を検出した。楠・荒田町遺跡第１次調査では前期末から中期初頭の貯蔵穴が、第５次調査でも同時期の貯蔵穴を検出している。このほか上

1．大橋町東　2．大手町　3．大田町　4．戎町　5．若松町　6．水笠　7．松野　8．大橋町　9．二葉町
10．林山窯址　11．名倉　12．長田神社境内　13．御船　14．神楽　15．五番町　16．御蔵　17．河原　18．室内
19．三番町　20．能野　21．会下山　22．上沢　23．雪御所　24．東山　25．兵庫松本　26．湊川　27．大開
28．塚本　29．祇園　30．楠・荒田町　31．兵庫津
A．得能山古墳　B．池田古墳　C．夢野丸山古墳　D．会下山二本松古墳　E．念仏山古墳

第２図　周辺遺跡位置図　S＝1：25,000

沢遺跡で流路内から前期前半の土器類が出土した。中期では東山遺跡（第Ⅲ様式）、熊野遺跡、会下山一本松遺跡（現会下山遺跡、第Ⅲ様式）で土器類が出土し、河原遺跡（第Ⅳ様式）では約40個のゴホウラ貝輪が入った壺が出土している。楠・荒田町遺跡第16次調査ではこの期の掘立柱建物、壺棺、東西方向の２条の溝、南北方向の溝を検出した。上沢遺跡では弥生時代前期土器、戎町遺跡では弥生時代前期の水田址および農具類と、弥生時代中期の方形周溝墓群を調査している。長田神社境内遺跡では竪穴建物、土器群などを確認している。

古墳時代初頭～前期の集落址も兵庫松本遺跡、上沢遺跡、長田神社境内遺跡や御蔵遺跡で調査され、長田神社境内遺跡では竪穴建物が埋没する過程で投棄された多量の土器類と共に小型倭鏡が出土した。若松町遺跡では庄内期の土器が出土した。

古墳時代中期～後期の集落遺跡としては、柵列で区画された豪族居館を検出したことで知られる松野遺跡で、多くの竪穴建物を確認し、滑石製模造品、井戸（ツゲ材の刀把装具、ヤブツバキ材竪杵が出土）などを検出した。神楽遺跡では韓式系土器が、上沢遺跡では滑石製模造品が出土した。このほか集落址は湊川遺跡や三番町遺跡で確認されており、三番町遺跡では竪穴建物が検出され、近接する南北方向の溝中から直径５㎝の小型倭鏡が出土している。大橋町遺跡第１次調査では古墳時代の溝、大橋町遺跡第２次調査でも古墳時代の溝（TK43、217期）を検出している。

前期古墳の得能山古墳は正確な規模は不明であるが、内部に竪穴式石室があり、粘土床上から頭骨と共に画文帯神獣鏡、内行花文鏡が出土した。会下山二本松古墳は全長約55mの前方後円墳で、竪穴式石室が調査されている。副葬品には銅鏡、刀剣類、板状手斧、鉄鏃、刀子や滑石製琴柱形石製品などがあった。夢野丸山古墳は直径約20mの円墳とされており、内部に特殊な竪穴式石室があり、副葬品として重列式神獣鏡、銅鏃、鉄鏃、刀剣類、鎌、斧、鉾などが出土した。

中期の古墳は周辺では念仏山古墳が知られているが、埴輪の採集に留まり実態は明確ではない。後期の古墳については確認されるものが少なく、現時点では池田古墳が知られているのみである。林山町の須恵器窯址は採集資料ではあるが６世紀後半のもので、市内の古墳時代の窯址として稀有な例である。

奈良時代から平安時代のものとしては、楠・荒田町遺跡の範囲内にある神戸大学付属病院内から二重堀、掘立柱建物が検出された。第16次調査では石帯が、第53次調査では緑釉陶器、灰釉陶器や和鏡を伴う木棺墓を確認している。祇園遺跡では園池遺構とそこに投棄された多量の京都系土師器小皿が出土した。この遺跡からはこの外青磁、白磁、吉州窯系玳玻天目茶碗、京都産・播磨産の瓦類、常滑焼、渥美焼や石帯などが出土している。大橋町遺跡第１

次調査では飛鳥時代の耕作溝及び平安時代末の掘立柱建物や溝が、大田町遺跡では掘立柱建物、皇朝銭入りの須恵器壺、緑釉陶器、黒色土器類が、上沢遺跡では井戸が確認され銅鏡が出土した。御蔵遺跡では掘立柱建物、緑釉陶器、三彩陶器、硯、皇朝銭が出土し、二葉町遺跡では掘立柱建物、井戸、墓などを検出した。松野遺跡では掘立柱建物や井戸を確認し、井戸からは牛骨なども出土している。

鎌倉時代では大橋町遺跡第２次調査で曲物を水溜に転用した井戸が、二葉町遺跡では木棺墓を発掘し歯牙、瓦器埦、土師器小皿が出土し、軒丸瓦も出土している。この二葉町遺跡では準構造船を井戸枠に転用した井戸も見つかっている。井戸は13世紀中頃に廃絶したもので、準構造船自体は11世紀末から12世紀前半に廃船となったものと推定されている。

兵庫津遺跡は中世～近世を中心時期とする遺跡である。近年の調査で奈良時代の遺構・遺物も確認したが、多くは14世紀以降のものが多い。

主要文献

会下山遺跡

喜谷美宣「新修神戸市史　歴史編Ⅰ自然・考古」神戸市1989年

名倉遺跡

直良信夫「神戸市名倉町出土の縄文式土器片」『近畿古代文化叢考』草牙書房1943年

楠・荒田町遺跡

黒田恭正・阿部敬生「楠・荒田町遺跡第11次調査」『平成４年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1995年

大橋町遺跡

中谷正『大橋町遺跡第１次－１～６次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2006年

長田神社境内遺跡

黒田恭正・佐伯二郎『長田神社境内遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会1990年

藤井太郎・丸杉俊一郎「長田神社境内遺跡第10次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2001年

二葉町遺跡

川上厚志編『二葉町遺跡第３・５・８・９・12次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会2001年

大開遺跡

前田佳久『大開遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会1993年

東山遺跡

小林行雄「神戸市東山遺蹟彌生式土器研究１」『考古学』第４巻第４号1933年

熊野遺跡

小林行雄「神戸市東山遺蹟彌生式土器研究１」『考古学』第４巻第４号1933年

会下山遺跡
會下山一本松：太田除郎「神戸市の史前遺蹟」『考古学』第３巻第２号1932年
河原遺跡
濱田耕作「貝輪を容れた素焼壺」『人類学雑誌』第36巻第９～12号1921年
上沢遺跡
阿部敬生編『上沢遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会1995年
小林さやか『上沢遺跡第55次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会2009年
谷正俊・富山直人『上沢遺跡Ⅲ第38・46・50次調査』神戸市教育委員会2004年
戎町遺跡
山本雅和「戎町遺跡第１次発掘調査概報」神戸市教育委員会1989年
藤井太郎編『戎町遺跡第35・38・50・56次調査、松野遺跡第32・33・38次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会2005年
兵庫松本遺跡
中谷正『兵庫松本遺跡第２～４・12・17・19次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2005年
若松町遺跡
山田清朝・高木芳史『若松町遺跡』神戸市教育委員会2000年
松野遺跡
千種浩「松野遺跡発掘調査概報」神戸市教育委員会1983年
口野博史「松野遺跡発掘調査報告書　第３～７次調査」神戸市教育委員会2001年
神楽遺跡
菅本宏明「神楽遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会1981年
渡辺伸行・西岡誠司「神楽遺跡」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』1987年
湊川遺跡
西岡巧次「湊川遺跡」『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1989年
三番町遺跡
口野博史・水嶋正稔「三番町遺跡第２次調査」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1994年
山仲進『三番町遺跡第１次調査（1987・1988年度）』妙見山麓遺跡調査会2006年
得能山古墳
梅原末治「神戸市板宿得能山古墳の調査」『歴史と地理』第14巻第４号1924年
森本六爾「得能山古墳」『考古学雑誌』第14巻第３号1924年
会下山二本松古墳
吉井太郎・辰馬悦蔵他「会下山二本松古墳及ビ経塚」『兵庫県史跡名勝天然紀念物調査報告書』第５輯兵庫県1928年
北野耕平「摂津会下山二本松古墳における内部構造の考察」『兵庫史学』65　1974年
黒田恭正「会下山二本松古墳」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1987年

夢野丸山古墳

梅原末治「神戸市丸山古墳と発見の遺物」『考古学雑誌』第14巻第５号1924年

梅原末治「神戸市夢野丸山古墳」『兵庫県史跡名勝天然紀念物調査報告書』第２輯兵庫県1925年

今尾文昭「備忘の呉鏡－夢野丸山古墳出土鏡の複製品」『三国志の時代－２．３世紀の東アジア－』特別展図録第77冊奈良県立橿原考古学研究所附属博物館2012年

念仏山古墳

喜谷美宣「市街地に消えた古墳Ⅰ－念仏山古墳－」『神戸市立博物館研究紀要』第６号　神戸市立博物館1989年

池田古墳

森田稔「長田区観音山古墳の出土遺物」『神戸市立博物館だより』No.23神戸市立博物館1988年

林山町の須恵器窯址

稲沢正行・渡辺伸行「神戸市長田区林山窯について」『神戸古代史』３－１ 1986年

祇園遺跡

口野博史「祇園遺跡第３次調査」『平成６年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1998年

富山直人「祇園遺跡第５次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2000年

内藤俊哉・中村大介「祇園遺跡第14次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2013年

阿部功「祇園遺跡第15次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2013年

大田町遺跡

森内秀造・山上雅弘「神戸市須磨区大田町遺跡発掘調査報告書」兵庫県教育委員会1993年

山口英正・東喜代秀「大田町遺跡第５次調査」『平成６年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1998年

御蔵遺跡

安田滋編「御蔵遺跡第17・38次調査報告書」神戸市教育委員会2001年

安田滋・富山直人・石島三和「御蔵遺跡第４・６・14・32次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2001年

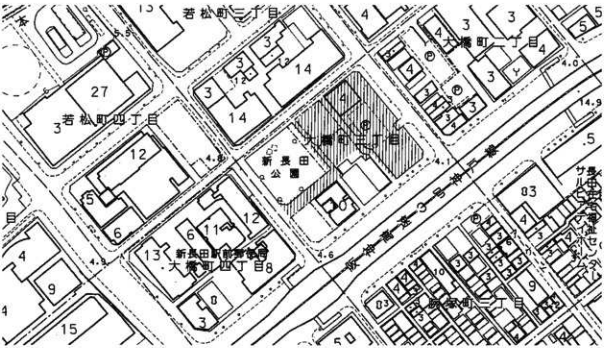
谷正俊「御蔵遺跡Ⅴ第26・37・45・51次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2003年

兵庫津遺跡

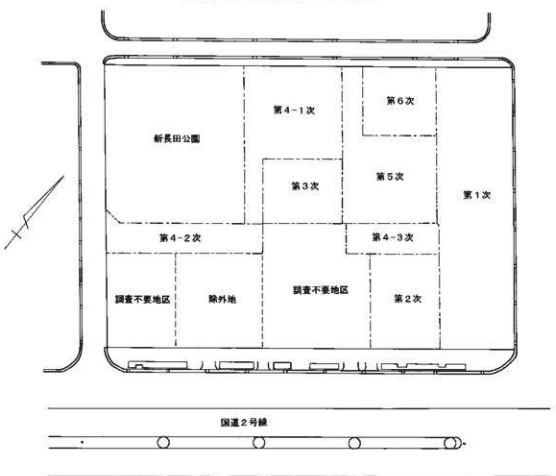
阿部功「兵庫津遺跡第42次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2008年

黒田恭正・佐伯二郎・内藤俊哉「兵庫津遺跡発掘調査報告書第14・20・21次調査」神戸市教育委員会2009年

Ⅲ．調査地区割

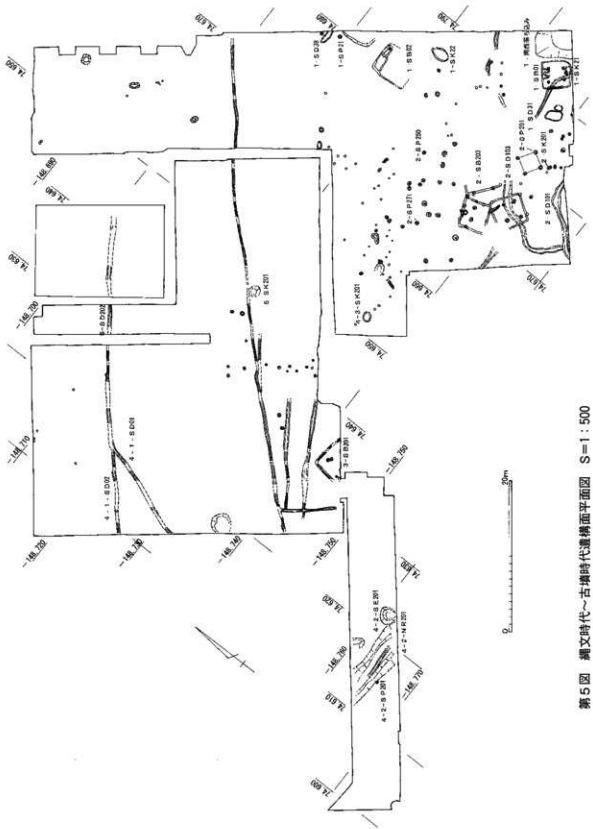


第３図　調査地位置図　S=1：2,500



第４図　調査地区割り図

第１次調査から第６次調査までの調査区は上図の通りである。



第５図　縄文時代～古墳時代遺構面平面図　S＝1：500

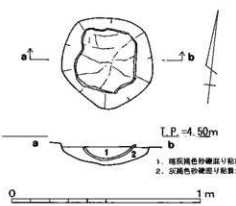
今回の発掘調査は既存建物の解体等により複数年度に亘り、かつ現場担当者も交代を繰り返したこともあり、調査区ごとに遺構番号が付されている。今回の報告書作成に当たり新規の番号を付けると、後日遺物の検索などに支障が生じることも考慮し、以下の記述ではやや煩雑とはなるが、第５次調査区の第１遺構面ピット１は５-SP101などと表示し、説明を加える。

尚、現地調査段階で遺構と認識したもののうち、その後の検討により、生活面の自然の窪みにベース土と異質の土が堆積した非人為的と現時点で判断されたものについては、本報告書の遺構図から除外し、何らかの遺物を伴うものを中心に記載する事とする。また当遺跡に関する概要は各年度の『神戸市埋蔵文化財年報』などで既に報告をしているものがあるが、遺構の所属時期等に関して一部変更した箇所がある。

１．縄文時代～弥生時代の遺構と遺物

（１）縄文時代の遺構

４-２-SP201（第５・６・８図）は径0.5mほどで、縄文時代晩期の土器１が出土した。体部片のみであるため、形状はわからない。近隣の松野遺跡や二葉町遺跡で出土している縄文時代晩期の土器と類似するものと考えられる。



第６図　４-２-SP201平面・断面図

２-SP250からは縄文時代晩期の浅鉢２が出土した。

１-SK21からは縄文時代の深鉢３が出土した。

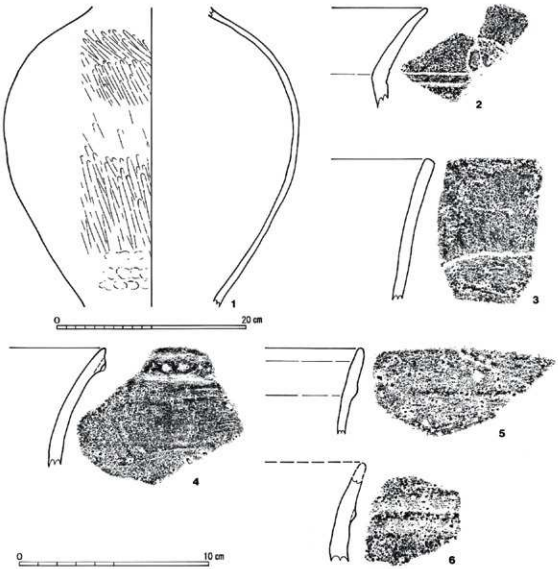
（２）縄文時代の遺物（第７図）

１は現高31.8cm、最大幅31.4cmで口縁部及び底部を欠いている。外面はやや粗いヘラミガキで調整する。内面は磨滅のため調整不明である。外面下半に煤が付着する。

２は体部から斜め外方に伸びる口縁部を持つ浅鉢で、屈曲部外面に２条の沈線を巡らす。沈線の原体は半裁竹管と思われるが明確ではない。内外面の調整は磨滅により不明である。

３は無文の深鉢である。外面調整は不明であるが、内面はたて方向のナデで仕上げている。

４～６は遺構ベース土から出土した縄文時代晩期の深鉢である。４は外面の口縁端部から若干下がった位置に一条の凸帯文を巡らし、やや大きめの刻み目を施す。外面はよこ方向の条痕文を残す。内面の調整は不明である。５は口縁端部から約２cm下がった位置に、一条の凸帯文を巡らしている。凸帯の刻み目の有無については磨滅のため明確ではない。外面調整は不明である。内面は指オサエの跡が残る。



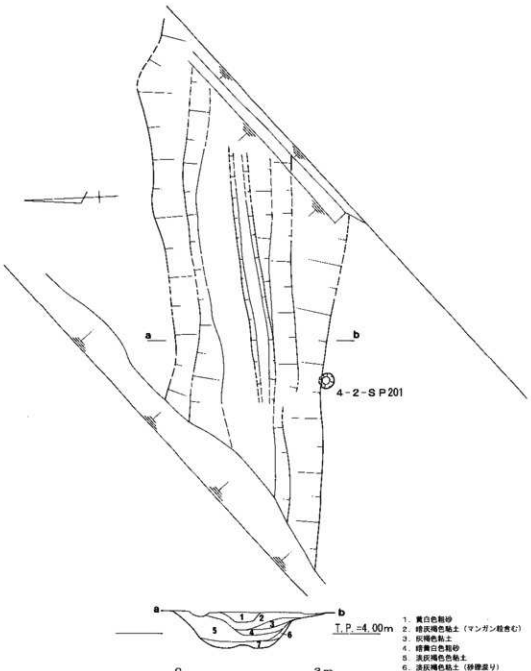
第７図　縄文時代遺物実測図

６は５と同様のものと考えられる。口縁端部を欠いている。内外面の調整は不明である。

（３）弥生時代中期の遺構

１-SD31からは弥生時代中期の細頸壺７、壺底部８が、２-SD103からは弥生時代中期の壺口縁部９及び河内産壺底部10が、２-SD101からは弥生時代中期の底部11が出土した。

４-２-NR201（第５・８図）は幅約3.5m、検出面からの深さ約0.8mを測る。粗砂と粘土が互層に堆積し、堆積状況などから、おそらく海からの作用を受けた滞筋ではないかと考えられる。弥生時代中期の壺体部・底部や回転台形土器と思われるもの、サヌカイト製楔形石器、サヌカイトチップ等が出土している（12・13・14・22）。



第8図　4-2-NR201平面・土層断面図

1-SP23は浅い窪みで遺構ではないが、弥生時代中期頃の壺底部15が出土している。このほか、1-南西落ち込みから弥生時代中期の壺底部16、2-包含層から弥生時代中期の壺底部17、4-3包含層から弥生時代中期の壺底部18、5-耕作溝からサヌカイト製石鏃19、5-遺構面からサヌカイト製石鏃20、4-2耕作溝からサヌカイト製石鏃21、2-SP11からサヌカイト製楔形石器23、2-SP271からサヌカイト楔形石器24、3-包含層からサヌカイト楔形石器25が出土している。

（4）弥生時代後期以降の遺構

1-SP21（第5図）は径0.9m、深さ10cmのピットである。弥生時代後期の細

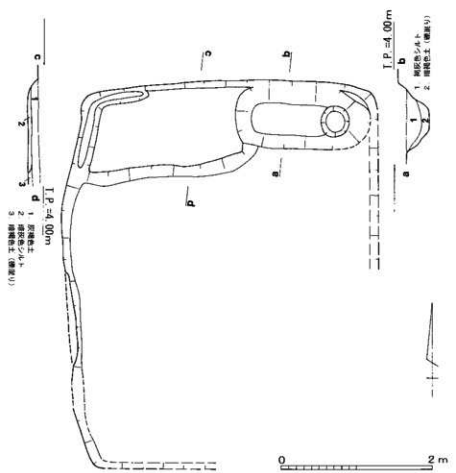
頸壺、甕と高坏脚部の小片が出土している（26・27・28）。

1-SD38（第５図）からは弥生時代後期の壺29、後期の底部30が出土した。

1-SB02（第５・９図）は南北辺6.2m、東西辺5.0m、深さ８㎝～12㎝の竪穴建物である。北辺の一部に幅1.2m、残高８㎝のベッド状遺構が設けられており、北西コーナー部周辺の壁面には、幅10㎝～15㎝の周壁溝が巡る。また、北東コーナー部には1.8m×0.9m、深さ床面から35㎝の隅円方形の土坑が確認されている。柱穴は検出部分においては確認できず、おそらく撹乱部分に存在すると考えられる。出土遺物は少なく、時期を決定づける要素に乏しいが、床面北東隅で東西に長い１-SB02内土坑から、弥生時代後期の鉢31、甕底部32のほか、河内産の土器片が出土している。

5-SK201（第５・10図）は径約1.6m、深さ約0.6mの円形土坑である。一部、現代のコンクリート基礎下にあるため全形は不明である。埋土は３層に分かれるが、最下層から弥生時代後期後半以降の土器類が出土した。二重口縁壺、高坏脚柱～裾部、甕、底部等が出土した（33・34・35・36・37・38）。

このほか、１-SK22から弥生時代後期の壺39、及び後期体部片、２-SP201から弥生時代後期の甕底部40、１-包含層から弥生時代後期の高坏坏部41、４-１-下層耕作溝から弥生時代後期の底部42が出土した。



第９図　１-SB02平面・土層断面図

（５）弥生時代中期の遺物（第11図）

７は口径7.6cmの細頸壺の口縁部である。外面上半はヨコナデで調整する。内面は磨滅のため調整不明である。

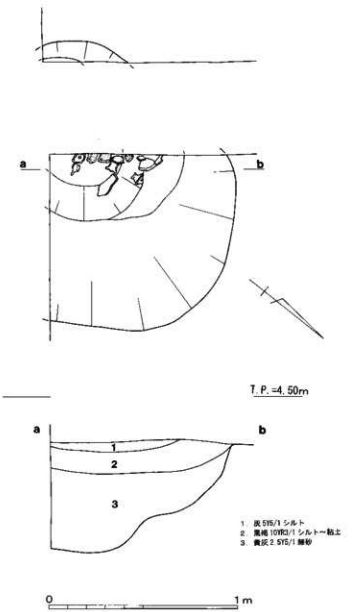
８は底径5.4cmの壺底部である。外面は縦方向の板ナデ調整である。内面は浅いヘラケズリの可能性があるが、明確ではない。

７・８は中期、後期の別が明瞭ではないが一応中期としておく。

９は弥生時代中期後半、第Ⅳ様式の広口壺口縁部と考えられる。口縁端部を肥厚させ、外面に３条の凹線文を巡らす。口径16.8cmである。

10は河内産壺の底部で、底径7.2cmを測る。内外面の調整は磨滅により不明である。

11は弥生時代中期頃の甕底部と思われる。底径7.4cmである。内外面の調整は磨滅のため不明である。



第10図　5-SK201平面・土層断面図

12は弥生時代中期の回転台形土器と思われるが、やや口径が小さくそれと断定ができない。径7.4cmを測る。内外面は磨滅のため調整不明である。

13は同期の壺底部である。外面ナデ、内面に指頭圧痕を残す。底径10.8cmである。

14は中期の壺体部片で、10条のクシ描き直線文が２帯と、条数不明の波状文が見られる。

15は弥生時代中期頃と考えられる壺底部である。外面はたて方向の板ナデ、内面はたて方向の指ナデを施す。底径6.0cmである。中期、後期の別は明確ではない。

16は弥生時代中期頃と考えられる壺底部である。外面はやや強くたてナデで調整している。内面は磨滅のため調整不明である。底径5.2cmである。

17は弥生時代中期頃と考えられる壺底部である。内外面は磨滅のため調整不明である。底径7.4cmである。

18は河内産土器の底部である。縄文時代晩期頃のものの可能性もあるが、一応弥生時代のものとしておく。上げ底の底部で、内外面をナデで調整している。底径7.0cmである。

19はサヌカイト製の凹基式石鏃である。長さ19.46mm、幅14.41mm、厚さ3.62mm、重さ0.9gである。

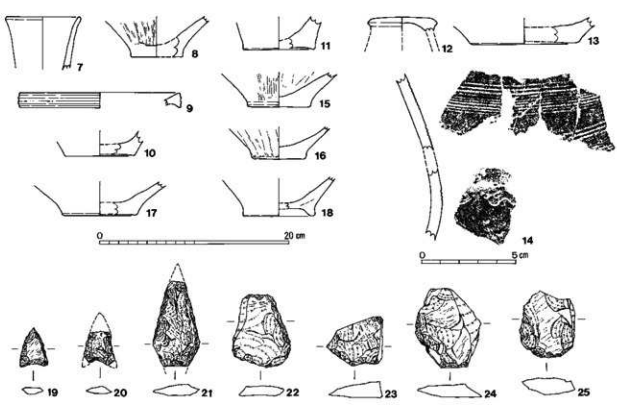
20はサヌカイト製の凹基式石鏃である。先端及び基部を欠く。現長17.66mm、現幅16.20mm、厚さ3.95mm、重さ1.3gを測る。

21はサヌカイト製の凸基式石鏃である。先端及び基部を欠く。現長44.79mm、幅24.0mm、厚さ5.57mm、重さ5.4gである。

22はサヌカイト製の楔形石器で、左辺に破断面を残す。他の3方に使用痕が認められる。長さ38.47mm、幅30.27mm、厚さ5.23mm、重さ7.5gである。

23はサヌカイト製の楔形石器で、右辺及び上辺に破断面を残す。上辺の一部及び下辺に使用痕がある。長さ24.76mm、幅28.46mm、厚さ7.97mm、重さ7.2gである。

24はサヌカイト製の楔形石器で、右辺に破断面を残す。左辺上半及び下辺に使用痕が見られる。長さ42.09mm、幅34.59mm、厚さ7.63mm、重さ11.4gである。



第11図　弥生時代遺物実測図（1）

25はサヌカイト製の楔形石器で、右辺に破断面を残す。左辺及び下辺に使用痕がある。長さ35.81㎜、幅28.92㎜、厚さ8.89㎜、重さ10.5gである。

（6）弥生時代後期以降の遺物（第12図）

26は弥生時代後期の細頸壺の口頸部で、頚部外面に貼り付けの断面三角凸帯文を一条巡らす。外面上半は磨滅のため調整不明だが、下半はたてヘラミガキを加える。内面中央部にはヘラミガキと見られる調整があるが、明瞭ではない。口径11.0cm、現高15.8cmである。

27は甕口縁部～体部で底部を欠く。体部外面に右上がり方向のタタキを残す。タタキは2～2.5本／cmである。体部下半にタタキ方向の変換部が見られる。口縁部内外面の調整は不明である。体部上半内面には粘土接合痕及び指オサエ痕が残る。内面下半はナデ調整と思われる。口径18.6cmを測る。

28は上半と下半が接合しないが、図上復元でほぼ完形となる甕である。上位に最大径がある体部と、くの字に屈曲する口縁部を持つ。口縁端部外面に一条の浅い凹線文が巡る。口縁部内外面をヨコナデで調整し、体部外面は右上がり方向のタタキが残る。外面底部は平行及び右下がり方向のタタキで成形している。体部内面は板ナデ調整を施し、肩部に指オサエ痕を残している。口径12.2cm、推定の高さ24.2cmである。

29は弥生時代後期の広口壺で、口縁端部をやや肥厚させる。内外面の調整は磨滅により不明である。口径17.6cmである。

30は29の底部と思われるが、体部を大きく欠いており明確ではない。磨滅のため調整は不明である。底径5.4cmを測る。

31は弥生時代後期後半の鉢である。口縁部に一条の不明瞭な凹線文を施す。口縁部内外面をヨコナデし、体部外面に9～10本／cmのハケ後たて方向のヘラミガキを加える。体部内面には6～7本／cmのハケ及びよこ方向のヘラミガキが残る。口径22.6cmである。

32は同期の壺底部である。外面調整は磨滅のため不明であるが、内面には7本／cmのハケが残る。底径3.2cmである。

33は広口壺の口縁部である。内外面は磨滅により調整不明である。口径16.0cmである。

34は口縁端部を欠くが、二重口縁の壺と思われる。ただし残存部がきわめて小さく器形については断定ができない。

35は壺体部下半～底部である。外面調整はナデと思われる。底部側面に一部タタキと見られる痕跡が残る。底部外面には径1cmの窪みが見られる。内面は磨滅により調整不明である。

36は高坏脚部である。内外面は磨滅し調整は不明であるが、脚部内面に指頭圧痕が残る。透かしは見られない。裾径11.4cmである。

37も高坏の脚柱～脚裾部である。裾部に透かしが計4か所穿たれる。磨滅のため調整不明の部分が多いが、外面下半にヘラミガキが一部残存する。脚

柱部内面にはシボリ目が見られる。残高6.4cmの小型品である。

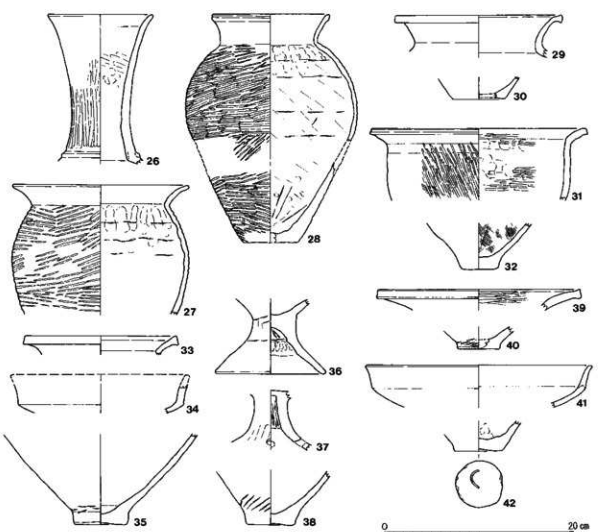
38は甕底部である。側面に2～3本／cmのタタキが見られる。内外面は磨滅し調整は不明である。底部外面に径約1.7cmの窪みが見られる。

39は弥生時代後期と思われる広口壺の口縁部である。口縁端部を僅かに肥厚させる。外面は磨滅のため調整不明であるが、内面にはよこ方向のヘラミガキが残る。口径21.4cmである。

40は弥生時代後期の甕底部である。4本／cmのタタキが残る。内外面の調整は不明である。底径4.2cmである。

41は後期中頃の高坏坏部である。体部から斜め上方に短く立ち上がる口縁部を持つ。磨滅のため内外面の調整は不明である。口径23.8cmである。

42は弥生時代後期と見られる底部である。外面に半裁竹管文が見られる。底径5.0cmである。



第12図　弥生時代遺物実測図（2）

2．古墳時代の遺構と遺物

（1）古墳時代の遺構

1-SB01（第5・13図）は南北辺3.8m、東西辺3.5m、深さ15cmを測る竪穴建物である。西辺に幅15cm、深さ5cmの周壁溝が認められる。主柱穴は4基で柱間隔南北約2.0m、東西約1.6mを測り、各々の径は0.5～0.6m、床面からの深さ0.3m～0.6mである。また、北辺の中央部分には不明瞭ではあるが竈と考えられる黄灰色粘土の痕跡が見られる。長さ0.9m、焚口の幅1.0mを測り、平面馬蹄形に壁体から造り付けられている。竈内には土師器の壺が倒立して出土しており、支脚の可能性がある。

出土遺物が少ないものの、概ねTK23～47型式と思われる須恵器が見られることから、この竪穴建物の時期は5世紀末～6世紀初頭頃と推定される。須恵器坏蓋のほか、土師器壺・甑・高坏脚と製塩土器が出土している（43・44・45・46・47）。

2-SB203（第5図）は後世の撹乱で大半が破壊されているが、平面形は東西辺1.2m以上、南北辺約5.0mを測る方形竪穴建物と考えられる。上面の削平により周壁溝のみ検出され、壁面の立ち上がりはない。内部からピットをいくつか検出したが、柱穴と断定できるものは見られない。出土遺物は土師器・須恵器の小片のみで、時期等の詳細は不明であるが2-SK201出土の須恵器に近い時期のものと推測される。

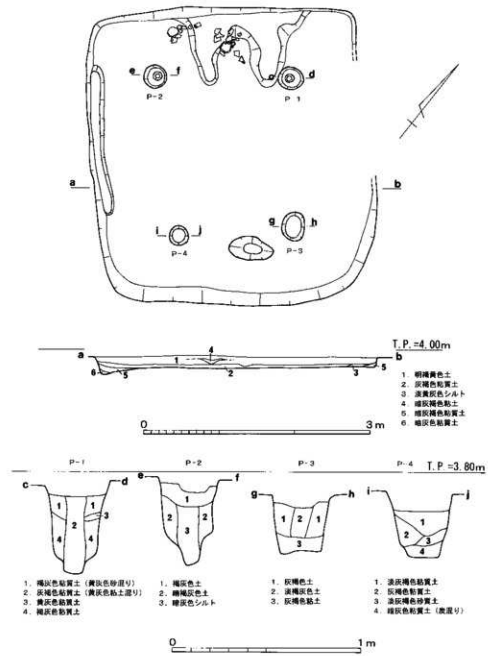
3-SB201（第5図）は第3次調査区の南辺西半で検出された溝であるが、ほぼ90°に屈曲して調査区外に続く。全体は不明であるが方形竪穴建物の周壁溝の一部と考えられる。内部に深いピットを隣接して2基検出しており、建物の柱穴と思われる。埋土は溝が灰茶色砂質土、ピットは淡茶灰色砂質土である。建物の規模は一辺4.6m以上である。

4-2-SE201（第5・14図）は南半部に埋設管が通っていたため、北半のみ調査を行った。南端が調査区外に広がるがおそらく平面円形で、検出した長径は2.4m、検出面からの深さ1.6mを測る。出土遺物は、土師器と須恵器である。埋土最下層の黒色砂混じり粘質土中からは、須恵器有蓋高坏の蓋、ハソウか壺と考えられる丸底の須恵器底部片が出土した。

有蓋高坏の蓋はTK47型式併行とみられることから、井戸SE201は古墳時代中期末～後期前半（5世紀末から6世紀初頭）の所産と考えられる。

このほか製塩土器等が出土している。また混入品として弥生時代後期の底部片が出土した（48・49・50）。

2-SK201（第5・15図）は2-SB204・206の西側で検出した小規模な土坑で、長径約50cm、短径約40cm、深さ約15cmを測る。土坑内からは、須恵器坏身が2点、土師器壺が1点のほか、土師器・須恵器の小片に混じって、製塩土器の小片が出土している。須恵器坏身の特徴から概ね5世紀末の時期の遺構と推測される（51・52・53）。



第13図　1-SB01平面・土層断面図

このほか、4－1－下層耕作溝から古墳時代の須恵器坏蓋54・55が4－3－包含層から古墳時代の土師器甕56が4－2－耕作溝から滑石製紡錘車57が出土している。

4－1－SD01（第５図）は第４次調査区の中央をほぼ南北方向に貫く状態で検出された溝である。調査区のほぼ中央で東に約30°屈曲する。調査区東端は撹乱で破壊されているが、第５・６次調査区で同一と考えられる溝が検出されている。第４次調査区内での長さは27.0m、幅40㎝～50㎝、深さ約30㎝である。埋土は場所により２～３層に分層でき、２層の部分は上から暗灰茶色粘質土・灰茶色粘質土で、３層の部分は上から暗茶色粘質土・暗灰茶色粘質土・灰茶色粘質土である。切合関係から平安期と思われる耕作溝群より古いこと

が判る。古墳時代と思われる須恵器片が出土した。

4－1－SD02（第5図）は4－1－SD01が屈曲する部分から派生する溝であるが、深さや埋土から4－1－SD01と区別できる。西端は調査区外に続いており、現状で長さ10.8m、幅30cm～40cm、深さ約20cmである。埋土は暗灰茶色粘質土である。出土した遺物は極めて少ないが、4－1－SD01と同じ古墳時代と推定される。

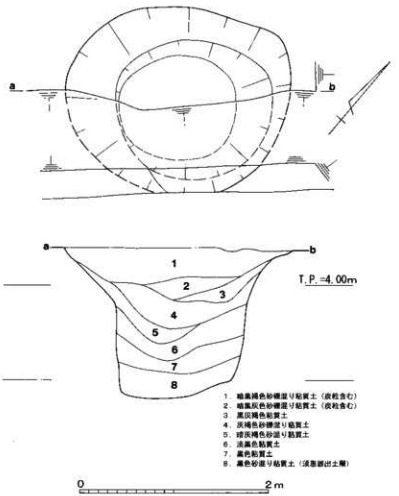
（2）古墳時代の遺物

43は須恵器坏蓋である。摩耗が激しく外面ヘラケズリの範囲等詳細は不明である。口縁端部は丸く収めるのみである。口径13.2cm、高さ4.5cmである。

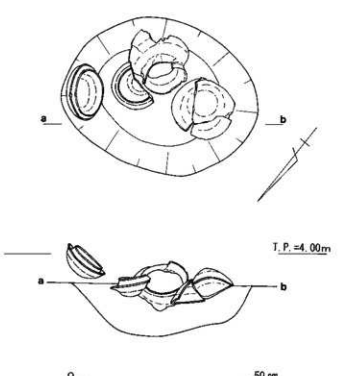
44は土師器高坏の脚柱部である。上端は円盤を充填して成形している。内面にはシボリ目が残る。外面調整は磨滅のため不明である。透かしの有無は不明である。残高5.6cmである。

45は器壁厚約2mmの製塩土器である。底部は欠けている。口径4.2cm、残高3.5cmである。

46はほぼ完形の状態で出土した土師器の長頸壺である。玉葱形の体部に短めの口縁を持つ。口縁部内外面をヨコナデし、体部はナデのみで調整している。体部



第14図　4－2－SE201平面・土層断面図



第15図　2－SK201平面・断面図

内面に粘土接合痕を残す。頸部付近は指で押さえ成形している。体部内面下半には板ナデ痕が残る。口径8.9cm、高さ15.2cmである。

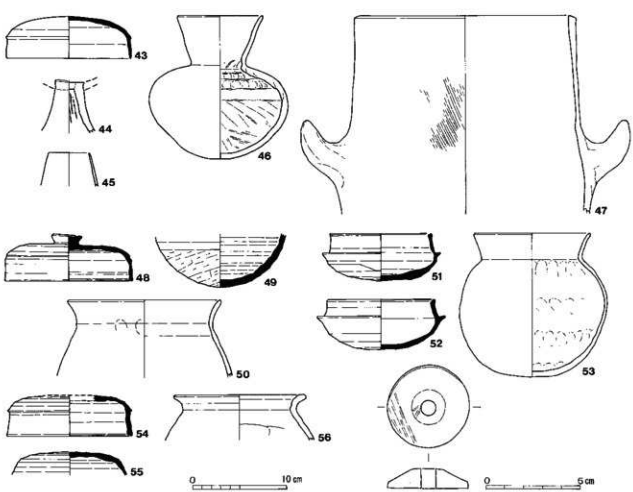
47は土師器甑である。底部を欠いている。体部両側面に角状の把手が付く。外面は6本／cmのハケの後、よこ方向のナデを加える。内面調整は把手付近にたて方向のナデを残す以外、磨滅により不明である。口径22.0cm、残高21.0cmである。

48は須恵器の有蓋高坏の蓋である。中央部が窪むつまみを持つ。天井部と体部の境の稜は鈍い。口縁端部は内側に肥厚し僅かに内傾する。外面に自然釉がかかり、ロクロの回転方向が断定できない。口径13.4cm、高さ4.9cmである。

49は須恵器の小型壺乃至ハソウの底部である。外面下半を静止ヘラケズリで調整する。ヘラケズリは大半が左下から右上方向に施している。残部の最大径13.8cm、残高5.7cmである。

50は土師器甕でくの字口縁を持つ。口縁端部は丸く収めるのみである。内外面は磨滅により調整は不明である。口径16.0cmを測る。

51は完形の須恵器坏身で口縁部の立ち上りは大きく、直立気味に立ち上がる。口縁端部はやや肥厚し、上面に一条の凹線が巡る。底部外面のロクロケ



第16図　古墳時代遺物実測図

ズリは全体の2/3に及ぶ。ロクロ回転方向は逆時計まわりである。体部外面に自然釉がかかる。口径10.8㎝、高さ5.0㎝である。

52は約50％残存する須恵器坏身で、口縁部の立ち上りは大きく、やや内傾気味に立ち上る。口縁端部は内傾し一条の凹線文が巡る。底部外面のロクロケズリは全体の1/2に施される。ロクロ回転方向は時計まわりである。口径11.2㎝、高さ5.3㎝である。

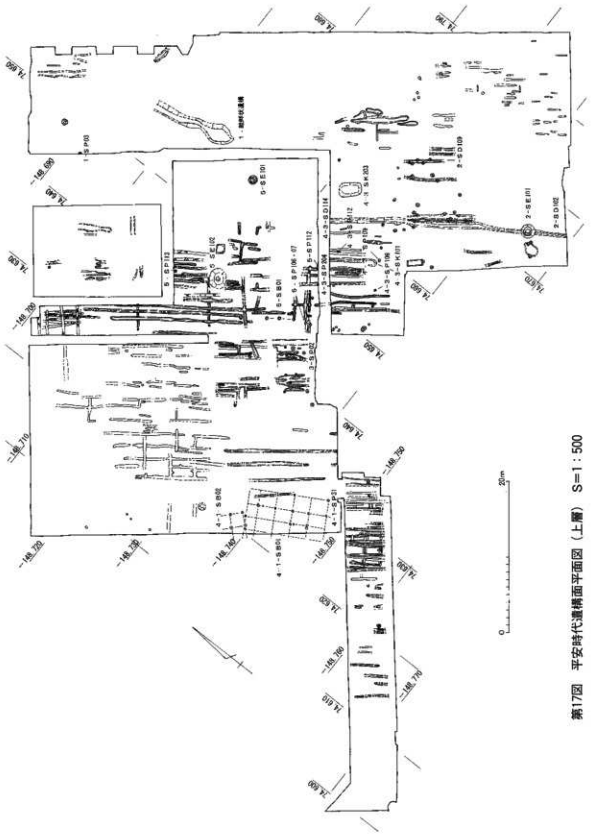
53はほぼ完形の土師器甕である。くの字口縁と球形に近い胴部を持つ。磨滅により調整不明の範囲が多いが口縁部外面はヨコナデである。体部内面には指オサエ痕が残る。

54は須恵器坏蓋で天井部と体部の境の稜はやや鈍い。口縁端部には鈍い凹線文が一条巡る。天井部外面のロクロケズリは全体の1/2に及ぶ。ロクロ回転方向は時計まわりである。口径13.2㎝。高さ4.3㎝である。

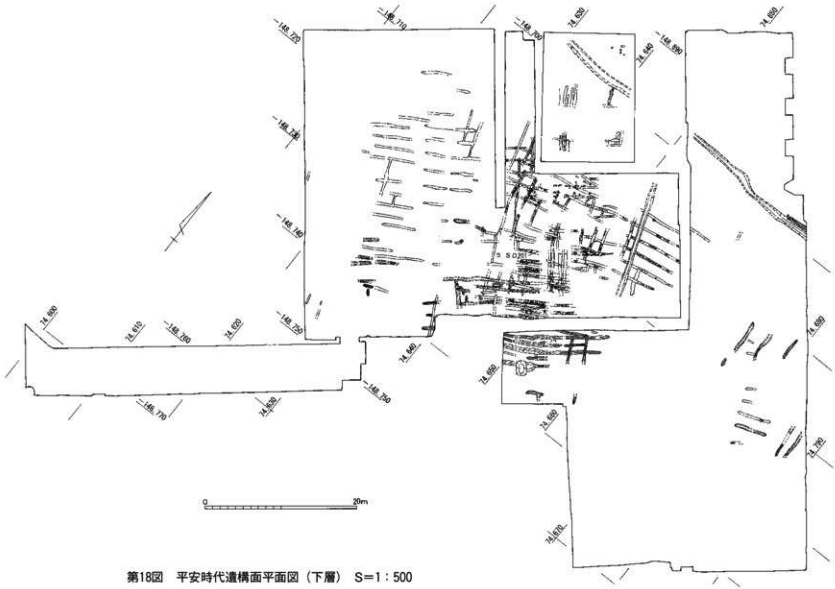
55は須恵器坏蓋の天井部片で、ロクロケズリは全体の1/2程度と思われる。ロクロ回転方向は逆時計まわりである。残部の最大径は12.2㎝を測る。

56は所属時期が明確ではないが、古墳時代と考えておく。土師器の甕でくの字口縁と大きく広がる体部を持つ。内外面は磨滅により調整は不明であるが、体部内面にヘラケズリと思われる痕跡が認められる。

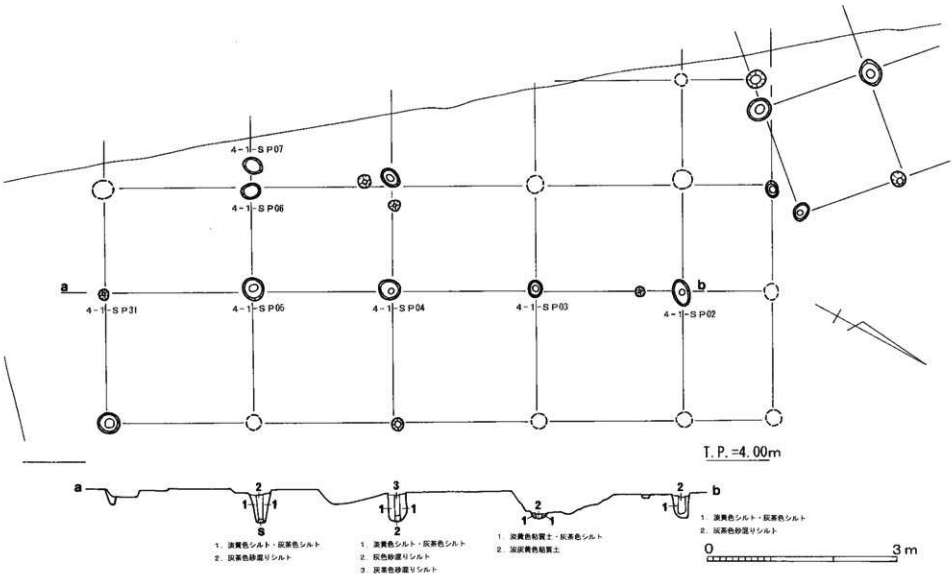
57は断面が低い台形を呈する滑石製紡錘車である。中央孔内面と側面によこ方向の調整痕が見られる。直径42.60㎜、高さ10.85㎜、孔径7.0㎜、重さ26.1gである。



第17図　平安時代遺構面平面図（上層）　S=1：500



第18図　平安時代遺構面平面図（下層）　S=1：500



第19図　4－1－SB01・SB02平面・土層断面図

（1）平安時代の遺構

4－1－SB01（第17・19図）は現状で桁行5間（10.5m）×梁間3間以上（5.4m以上）であるが、西側が調査区外に続くため全体の規模は不明であり、桁行と梁間の方向が入れ替わる可能性も残る。柱穴は直径約30㎝、深さ40～50㎝で、基盤層が粗砂になる柱穴（4－1－SP05）には根石が置かれていた。埋土は柱痕が灰茶色砂混じりシルト、掘形が淡黄色シルト・灰茶色シルト・茶色砂混じりシルトの混和したものである。4-1-SP31からは土師器塊70、黒色土器A類塊71と土師器小皿72が出土した。4－1－SP04からは平安時代の須恵器片、4－1－SP05からは根石に使用された砂岩と共に時期不明の須恵器坏の口縁部細片、土師器小片等が出土している。

4－3－SK101（第17・20図）は0.8m×0.6mの浅い土坑である。全体の半分程を建物基礎によって削られているが楕円形を呈していたと思われる。現存の深さは約5㎝である。埋土およびその周辺より、平安時代後期の須恵器塊、黒色土器A類塊、土師器小皿・塊・鍋口縁部等が出土した（58・59・60・61・62・63・64）。

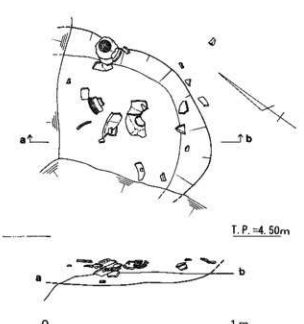
4－3－SK203（第17図）は3m×1.8m、深さ0.5mの方形を呈する土坑である。断面形はすり鉢状である。土坑は掘削後、しばらく開口していたようで、周囲から土砂が流れ込んでいることが土層断面から判る。埋土からは黒色土器A類塊65や土師器小皿66、須恵器甕79（5－SP109と接合）、土師器甕の口縁部細片、サヌカイトチップが出土した。

5－柱穴群（第17・21図）の内、5－SP103・104・105・111は直角に並んでおり、不確実ではあるが掘立柱建物（5－SB01）としておく。5－SP111～104の柱間距離は1.6m、5－SP104～103の柱間距離は1.95m、5－SP103～105の柱間距離は1.35mである。この内、5－SP103・105は第1面の耕作溝を切って作られている。5－SP103からは黒色土器B類塊、土師器小皿や須恵器細片等が出土している（67・68・69）。

尚、5－SP103の南側で検出した5－SP108は第1遺構面の耕作溝によって破壊されており、第5次調査区検出の柱穴にも時期差が存在することが判る。

また、5－SP106からは土師器塊74が出土している。

5－SP107からは須恵器塊73が出土し、5－Pit106と接合出土遺物と接合している。

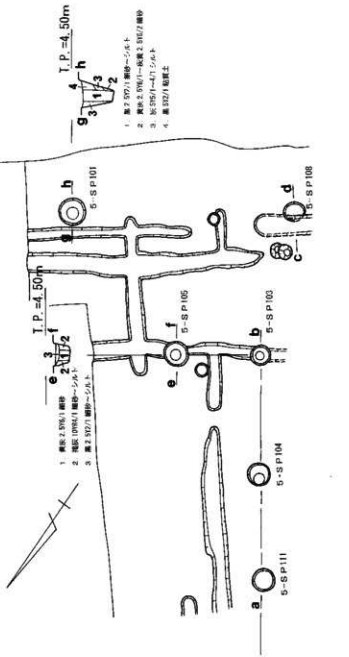


第20図　4－3－SK101平面・断面図

2-SD102（第17図）からは10世紀中頃～後半の土師器羽釜２個体（75・76）及び黒色土器A類埦と思われる小片が出土している。

4-3-SD114（第17図）からは須恵器埦77、黒色土器A類埦細片、土師器羽釜78、や土師器埦の小片が出土している。

5-SD201（第17図）からは須恵器甕口縁80が出土した。



第21図　5-SB01平面・土層断面図

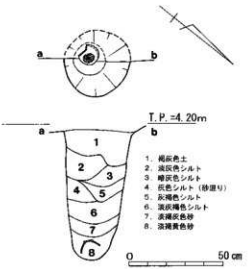
1-SP03（第17・22図）は径0.3m、深さ0.7mのピットである。底部より須恵器の塊81が完形で出土した。11世紀中頃～後半頃のものと考えられる。

この他のピットでは、3-SP02から土師器小皿82が、4-3-SP204から土師器塊高台部83が、3-SP42から土師器高台部84が、4-3-SP109から黒色土器A類塊85と土師器小皿が、4-3-SP112から黒色土器A類塊86が、4-3-SP108から黒色土器A類塊の高台87が出土している。

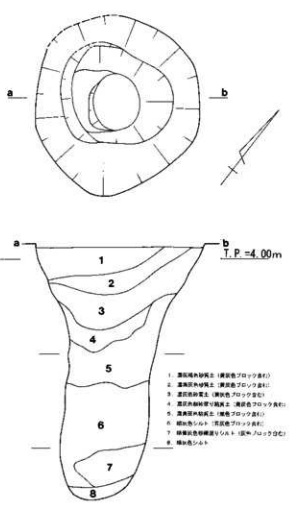
4-1-耕作溝からは15世紀後半頃の土師器鍋88と東播系捏鉢口縁部89、同底部90、2-SD109からは10世紀代と思われる土師器塊91、須恵器塊底部を検出した。

2-SE101（第17・23図）は平面形がやや不整な円形、断面形が漏斗状を呈し、直径約1.9m、深さ約2.7mを測る。井戸側材などの出土はなく構造は不明である。下層から黒色土器A類塊92、中層から土師器小皿が出土した。

5-SE101（第17・24図）の上面での径は1.15m×1.05mで、僅かに楕円形を呈している。深さは検出面より約1.4mである。底部に曲物を設置し水溜としている。曲物は土圧により変形し長径50㎝、短径40㎝を測る。埋土の状況から本来有機質の井戸枠が存在したものと考えられる。曲物内の埋土は自然堆積土であるが、それより上層（第24図土層No.5）は人為的に一気に埋められた状況を示している。出土遺物はごく少量かつ細片で時期は確定できない。



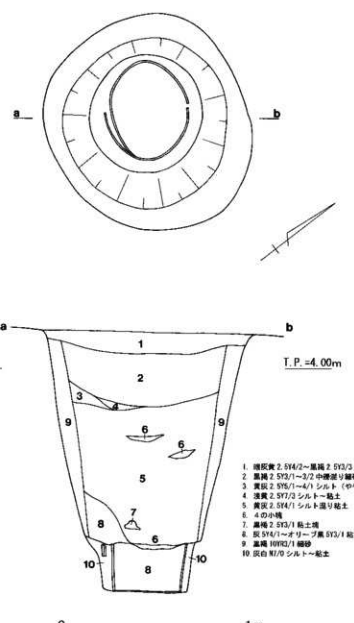
第22図　1-SP03平面・土層断面図



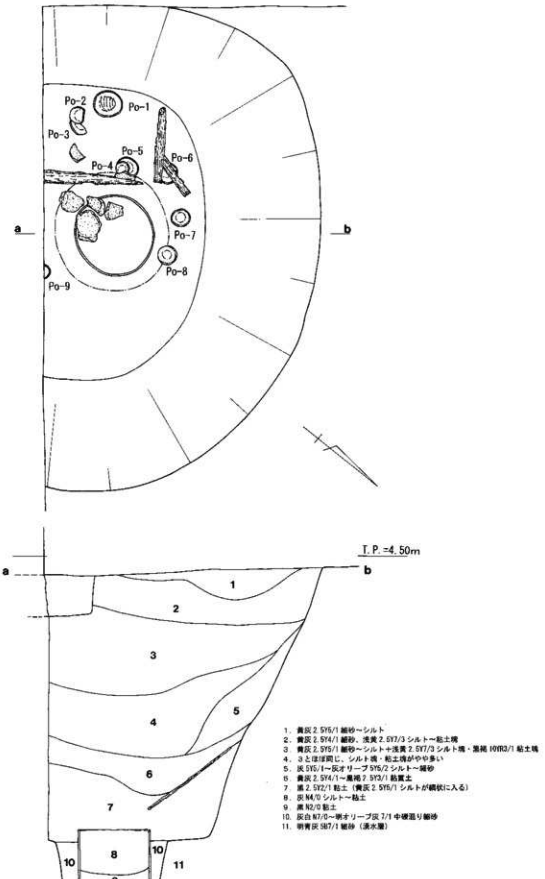
第23図　2-SE01平面・土層断面図

5-SE101は周囲がすでに削平を受けた面で検出しており、かつ出土遺物もごく少量、細片であることから所属遺構面を確定することも困難であるが、埋土の状況は後述の5-SE102と共通しており、両者はほぼ同時期のものと推定される。

5-SE102（第17・25図）は素掘りの井戸で、第1面の耕作溝が埋没した後に掘削されている。南辺は現代の建物の基礎下となり全形は不明であるが、直径約2.6mと推定される。底部は二段掘りとなっており最下面までの深さは約1.7mである。水溜に曲物を設置する（108）。埋土は最下部より約0.6mまでは自然堆積土（第25図土層No.7～9）で、これより上層（土層No.1～6）は人為的に一気に埋められた状況を示し、5-SE101と様相が共通する。遺物は自然堆積土No.7内及びその上面近くから完形や完形に近い状態の瓦器埦・小皿が出土している（93～107）。瓦器類の時期は、12世紀中頃と思われる。遺物の出土状況から井戸底部に土が堆積し井戸の機能が低下あるいは停止した段階で完形の瓦器類を使用する祭祀的行為が行われ、その後一気に埋め戻されたものと推測される。出土した瓦器埦の外面に「C」字形の墨書を持つものがある。埋土上層には12世紀末～13世紀代に下る東播系の須恵器捏鉢や土師器小皿が含まれる。



第24図　5-SE101平面・土層断面図



第25図　5-SE102平面・土層断面図

5-SP112（第17図）は径約20cm、深さ約40cmの小穴で、埋土から土師質の棒状土錘が計11個体（完形7、破片4）出土した（109～119）。

5-SD202（第17図）からは飯蛸壺120が出土した。遺構の切りあい関係が明確ではないが、第4次調査区からの溝状遺構（4-1-SD01）との繋がりを考慮すれば古墳時代の可能性がある。

4-3-第1面ピット群　当該調査地の南半分ではピットが散在している。一部のピットに柵列状に並ぶものがあるが、掘立柱建物は構成しない。

5-SP113（第17図）は出土遺物がなく時期は不明であるが、5-SE102同様第1遺構面の耕作溝埋没後に掘削されており、これと同時期のものと推定される。

5-1-耕作溝は第1遺構面で検出した耕作溝で、ほぼ1m間隔で南北に伸びるものと、これに直交し約4m～10mの間隔をあけ東西に伸びるものの2種がある。このうち東西方向の耕作溝は、南北のそれを切るものと切られるものに分かれ、時期差が認められる。埋土からの遺物はごく少量かつ細片で時期を決定することは現時点では困難であるが、耕作溝埋没後の井戸（5-SE102）や5-SP103（5-SB01）出土土器などから見て、遅くとも11世紀後半～12世紀前半以前と考えられる。

（2）平安時代の遺物（第26～29図）

58は須恵器塊で、体部外面に一条のヘラ沈線が巡る。底部は体部との境に明確な段を作る。底部外面には回転糸切り痕が残る。ロクロ回転方向は時計まわりである。口径15.2cm、高さ5.2cmである。

59は土師器小皿で、口縁端部は上方に肥厚する。内外面は磨滅のため調整不明である。体部外面に指頭圧痕が見られる。口径18.4cmである。

60は土師器甕で、口縁端部近くの内面にやや甘い段がある。体部は外方に拡がらない特徴がある。口縁部外面調整は磨滅のため不明である。同内面は4本／cmのヨコハケ、体部外面はヨコナデ、同内面はナデで調整する。口径26.0cmである。

61は土師器塊で底部形態は同時期の須恵器塊と共通し、体部との境に明確な段を作る。内外面の調整は磨滅により不明で、底部の成形技法も明確ではない。口径12.2cm、高さ4.5cmである。

62は黒色土器A類塊で、体部内面と口縁部外面に炭素の付着が見られる。体部内面にはヘラミガキが施されているものと思われるが、残存状態が良好ではなく、詳細不明である。体部外面には指頭圧痕がある。高台は貼付により、断面三角形の形状を呈す。口径13.0cm、高さ6.2cm、底径6.2cmである。

63は黒色土器A類塊で、体部内面と口縁部外面に炭素の付着が見られる。体部内面にはヘラミガキが施されるが、残存状態が良好ではなく、方向などの詳細は不明である。口縁部外面はヨコナデ、体部外面に指頭圧痕が見られる。口径14.4cmである。

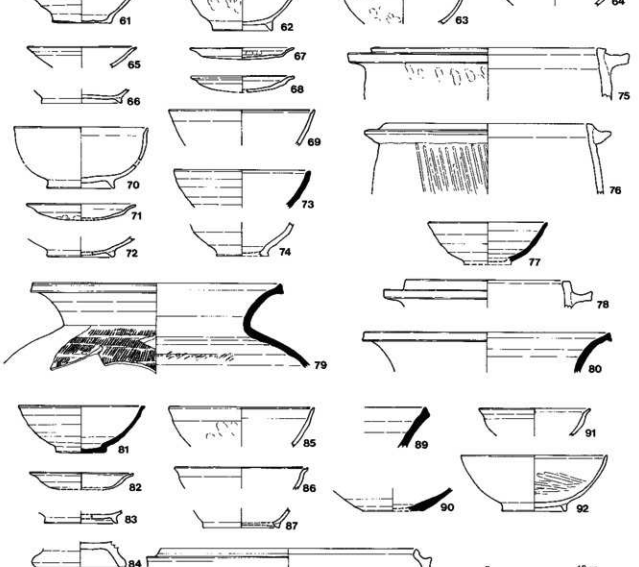
64はやや浅めの黒色土器A類塊で、体部内面に炭素の付着が見られる。内面

はよこ方向のヘラミガキと思われる。外面調整は残存状態が良好ではなく詳細は不明である。口径13.8cmである。

65は土師器小皿で、口縁端部内面に一条の凹線文が巡る。内外面の調整は磨滅のため不明である。口径11.4cmを測るが小片のため不明確である。

66は黒色土器A類埦の高台部破片である。内面に炭素の吸着が見られる。高台は断面三角形で貼付成形である。底径8.4cmである。

79は須恵器甕で、この4-3-SK203と5次調査区から出土した破片が接合した。斜め上方に拡がる口縁部を持つ。体部最大径は口縁部径を凌駕する。



第26図　平安時代遺物実測図

口縁端部を上下に拡張する。体部外面には6本/cmのタタキ、同内面には青海波文が見られる。口縁部内外面をロクロナデで調整し、体部外面にもタタキ成形後ロクロナデを一部加える。口径26.2cmである。

67は土師器小皿でくの字口縁を持つものである。内外面は磨滅により調整不明である。体部内面に指頭圧痕が残る。口径11.0cm、高さ1.2cmである。

68は「て」の字口縁の土師器小皿で、口縁部内面に一条の凹線文が巡る。口縁部内外面をヨコナデし、体部内外面をナデで調整する。口径10.8cm、高さ1.7cmである。

69は黒色土器B類埦で、口縁部内面に一条の凹線文が巡る。口縁部外面をヨコナデし、体部外面をナデ調整する。体部内面はよこ方向のヘラミガキを施す。口径15.4cmである。

70は土師器埦で断面三角形の高台が付く。口縁部はナデによって僅かに外反する。高台外面のヨコナデ調整以外は、磨滅のため内外面調整が不明である。口径14.0cm、推定高6.5cm、底径7.0cmである。

71は土師器小皿で、口縁部は単純に外反するのみである。口縁部内外面はヨコナデと思われるが明確でない。体部外面に指頭圧痕が残る。口径11.6cm、高さ1.7cmである。

72は黒色土器A類埦の高台部破片である。磨滅により内外面の調整は不明である。底径6.8cmである。

73は須恵器埦で、5-SP106の破片と接合する。口縁部内外面に自然釉が付着する。口径14.2cmである。

74は土師器埦で底部は糸切と見られる。内外面はナデと思われるが、磨滅のため明確ではない。

75は貼付の断面長方形の鍔を持つ土師器羽釜である。体部外面に指頭圧痕が残るがその他の調整に関しては磨滅のため不明である。口径23.0cmである。

76は貼付の断面三角形の鍔を持つ土師器羽釜である。体部外面に2本/cmの荒いたて方向のハケが残る。磨滅のため調整不明である。

77は須恵器埦で、底部を欠く。底部と体部の境に段があるタイプと考えられる。内外面をロクロナデする。口径12.4cm、推定高4.5cmである。

78は貼付の断面長方形の鍔を持つ土師器羽釜である。外面はヨコナデ調整、内面は磨滅のため調整不明である。外面の鍔以下に煤が付着する。口径16.0cmである。

80は須恵器甕口縁部で、口縁端部を上下に肥厚する。内外面をロクロナデする。口縁端部付近に自然釉が付着する。4-3-SK203出土のものと同一個体の可能性がある。口径26.0cmである。

81は須恵器埦で、底部と体部の境に段を持つものである。体部内外面をロクロナデで調整する。底部外面は回転糸切り痕が残る。ロクロ回転方向は時計まわりである。口径13.4cm、高さ5.0cm、底径5.2cmである。

82は「て」の字口縁の土師器小皿である。磨滅により内外面の調整は不明である。口径10.1cm、高さ1.8cmである。

83は土師器塊の高台部である。断面三角形の高台部である。外面をヨコナデ、それ以外をナデで調整する。底径7.6cmである。

84は土師器の塊の高台と思われるものである。内面及び高台部内をナデ、ヨコナデで調整する。外面は磨滅のため調整不明である。底径8.0cmである。

85は黒色土器A類塊で、口縁部内面に段をもつ。口縁部外面はヨコナデ、体部に浅い指頭圧痕が残る。内面はヘラミガキであるが方向等詳細は不明である。内面にのみ炭素の吸着が見られる。口径15.2cmである。4-3-SK101に同一個体と見られる破片がある。

86は黒色土器A類塊で、口縁部がナデによって僅かに外反する。口縁端部内面に二条の浅い沈線文が巡る。磨滅により内外面の調整は不明である。内面と口縁部外面に炭素の吸着が見られる。口径14.0cmである。

87は黒色土器A類塊の高台片である。体部下半と高台部が残存する。高台は断面形三角形を呈する。磨滅により内外面の調整は不明である。内面に炭素の吸着が見られる。底径8.0cmである。

88は土師器鍋である。内外面をヨコナデ調整する。室町時代、15世紀後半ころのものだが、耕作溝から出土したためここで報告する。

89は東播系須恵器捏鉢の口縁部である。内外面にロクロナデ痕が残る。口縁部外面に自然釉が付着する。12世紀中頃と考えられる。

90は東播系須恵器捏鉢の底部で、内外面にロクロナデ、底部外面に回転糸切り痕が残る。小片のためロクロ回転方向は不明である。底径6.4cmである。

91は土師器塊である。磨滅のため内外面の調整は不明である。口径11.6cmである。

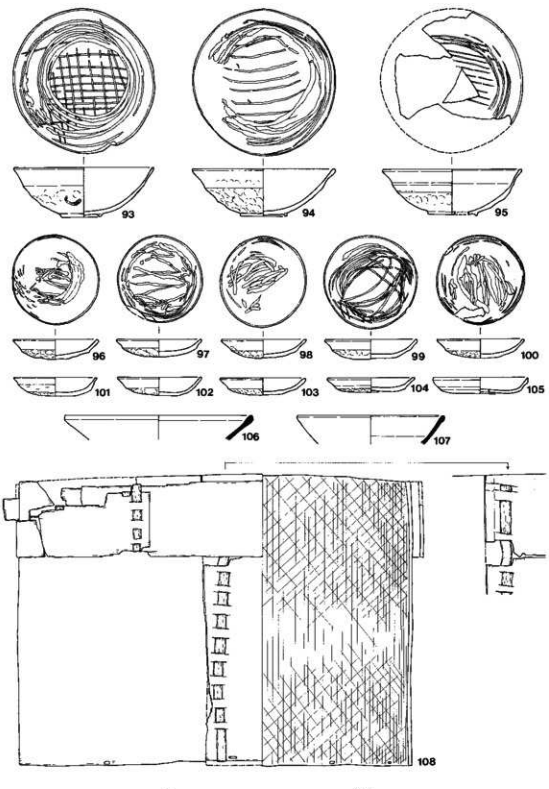
92は黒色土器A類塊で、口縁部は丸く収めるのみである。断面形が長方形の高台を持つ。口縁部外面はヨコナデ、内面はよこ方向のヘラミガキである。体部外面の調整は磨滅により不明であるが高台は、内外面ともヨコナデである。口径15.4cm、高さ5.9cm、底径6.5cmである。

93～108は5-SE102出土の遺物である。93（第25図Po-5）は完形の瓦器塊である。口縁端部は丸く収める。口縁部外面をヨコナデし、体部外面に指頭圧痕を残す。高台は断面形が低い台形～三角形を呈する。内面はナデの後、ヘラによる暗文を施す。暗文は底部に格子目文を描いた後、螺旋状文を周りに巡らしている。体部外面にC字形の墨書がある。墨書付近は炭素吸着が見られない。口径15.0cm、高さ5.3cm、底径4.0cmである。

94（第25図Po-1）は完形の瓦器塊である。口縁端部は丸く収める。口縁部外面をヨコナデし、体部外面に指頭圧痕を残す。指頭圧痕は前者より凹凸が激しい。高台は断面形が低い台形を呈する。内面はナデの後、ヘラによる暗文を施す。暗文は底部に平行線文を描いた後、螺旋状文を周りに巡らしてい

る。外面は炭素吸着範囲が小さい。口径15.0cm、高さ5.0cm、底径4.8cmである。

95（第25図Po-3）は約60％程度残存する瓦器埦である。口縁端部は丸く収める。口縁部外面をヨコナデし、体部外面に指頭圧痕を残す。高台は断面形が



第27図　5-SE102出土遺物実測図

低い三角形を呈する。内面はナデの後、ヘラによる暗文を施す。暗文は底部に平行線文を描いた後、螺旋状文を周りに巡らしている。口径14.6cm、高さ4.9cm、底径5.2cmである。

96～104までは完形乃至ほぼ完形に近い瓦器小皿である。そのうち、96～100までは内面のヘラ暗文が良く残るが、以下は残存状態が良好ではない。

96（第25図Po-9）は口縁端部を丸く収め、口縁部内外面をヨコナデし、体部外面に指頭圧痕を残す。内面のヘラ暗文は底部に雑な平行線文を描いた後、周囲に粗い螺旋状文を加える。口径9.0cm、高さ2.1cmである。

97（第25図Po-6）は口縁端部を丸く収め、口縁部内外面をヨコナデし、体部外面に指頭圧痕を残す。内面のヘラ暗文は底部に雑な平行線文を描いた後、周囲に粗い螺旋状文を加える。口径8.8cm、高さ1.9cmである。

98（第25図Po-7）は口縁端部を丸く収め、口縁部内外面をヨコナデし、体部外面に指頭圧痕を残す。内面のヘラ暗文は底部に雑な平行線文を描いた後、周囲に粗い螺旋状文を加える。口径8.8cm、高さ2.0cmである。

99（第25図Po-10）は口縁端部を丸く収め、口縁部内外面をヨコナデし、体部外面に指頭圧痕を残す。内面のヘラ暗文は、細い螺旋状文のみを密に描き、他と様相が異なる。口径9.5cm、高さ2.1cmである。

100（第25図Po-2）は口縁端部を丸く収め、口縁部内外面をヨコナデし、体部外面に指頭圧痕を残す。内面のヘラ暗文は底部に雑な平行線文を描いた後、周囲に粗い螺旋状文を加える。口径9.2cm、高さ2.0cmである。

101（第25図Po-4）は口縁端部を丸く収め、口縁部内外面をヨコナデし、体部外面にごく浅い指頭圧痕を残す。体部外面中位に浅いヘラケズリを加える。口縁端部が他と比較しやや短く立ち上がり、様相を異にする。口径8.8cm、高さ2.0cmである。

102（第25図Po-8）は口縁端部を丸く収める。口縁部内外面をヨコナデし、体部外面に指頭圧痕を残す。口径8.8cm、高さ2.0cmである。

103は口縁端部を丸く収める。口縁部内外面をヨコナデし、体部外面に指頭圧痕を残す。内面の暗文は平行線文+螺旋状文と思われるが、状態が良好ではなく詳細不明である。口径9.0cm、高さ1.9cmである。

104口縁端部は丸く収める。口縁部内外面をヨコナデし、体部外面に指頭圧痕を残す。口径9.1cm、高さ1.6cmである。

105は土師器小皿である。磨滅のため内外面の調整は不明である。口径10.0cm、高さ1.8cmである。

106は東播系須恵器捏鉢の口縁部で、口縁端部はやや肥厚する。内外面をロクロナデで調整する。口縁部外面に自然釉が付着する。口径19.8cmである。

107は東播系須恵器塊の口縁部である。内外面をロクロナデで調整する。口縁部外面に自然釉が付着する。口径15.4cmである。

108は水溜に転用された曲物で、厚さ2～3㎜に薄く削った長方形の薄板

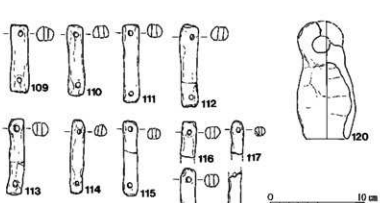
を側板とし、円形に曲げ合わせ部分を樺紐で綴じて作られている。合わせ部分の樺紐の左側に上下方向の外面ケビキが見られる。側板を外から補強するため幅8.0cmの帯を上端に巻いている。側板の下端近くに底板を止めるための木釘用の穴が計3か所確認できる。内面のケビキは垂直方向と格子を重ねたものである。側板の樺紐の綴じ方は内綴で下端は内面返し留めと見られる。帯の綴じ方は下端が不明であるが、上端は外綴じで内面返し留めを行っている。全体に歪みが生じているが、側板の内法径41.0cm、高さ30.3cmである。

109～119は土師質の棒状土錘で上下二か所に小孔が穿たれる。外面の調整はナデのみである。109は長さ7.0cm、中央幅17.16mm×16.66mm、重さ28.3gである。110は長さ7.2cm、中央幅14.29mm×14.16mm、重さ21.1gである。111は長さ8.0cm、中央幅14.90mm×14.83mm、重さ25.2gである。112は長さ8.3cm、中央幅16.18mm×14.87mm、重さ28.7gである。113は長さ7.8cm、中央幅15.31mm×13.13mm、重さ20.9gである。114は長さ7.2cm、中央幅13.39mm×13.25mm、重さ16.4gである。115は長さ7.7cm、中央幅15.59mm×13.31mm、重さ17.9gである。116は現長3.6cm、中央幅14.86mm×15.65mm、現重さ10.5gである。117は現長4.3cm、中央幅14.61mm×14.75mm、現重さ12.5gである。118は現長3.4cm、中央幅11.25mm×11.28mm、現重さ5.1gである。119は現長3.8cm、中央幅12.97mm×11.93mm、現重さ6.9gである。

120は土師質の釣鐘形の飯蛸壺である。外面はユビナデ、ユビオサエで調整し、内面はよこ方向のナデで仕上げている。鈕部を一部欠く。推定高さ12.5cm、口径4.2cmである。

121は須恵器捏鉢である。口縁端部は上方に拡張される。内外面はロクロナデで調整する。口縁部外面に重ね焼きの痕跡がある。口径20.0cmである。

122は須恵器埦である。体部と底部の境に明瞭な段を持つタイプである。内外面をロクロナデし、底部外面に回転糸切り痕がある。ロクロ回転方向は時計回りである。口縁端部外面に重ね焼きの跡がみられる。口径12.0cm、高さ5.2cm、底径4.4cmである。



第28図　5-SP112・SD202出土遺物実測図

123は土師器小皿で、口縁部内面をヨコナデ調整する以外は、磨滅のため詳細不明である。口径13.4cm、推定高さ3.3cmである。

124は土師器小皿で、大きく開く口縁部を持つ。磨滅により内外面の調整は不明である。口径15.2cm、高さ2.3cmである。15～16世紀代と考えられる。

125は黒色土器A類埦で、口縁端部内面に一条の沈線を巡らす。口縁部外面はヨコナデ、体部外面をナデで仕上げる。内面に炭素の吸着がみられる。内面下半によこ方向のヘラ暗文が残る。口径15.0cmである。

126は黒色土器A類埦で、口縁端部は丸く収める。磨滅の為内外面の調整及びヘラミガキなどは不明である。内面と口縁部外面に炭素の吸着が見られる。口径13.6cmである。

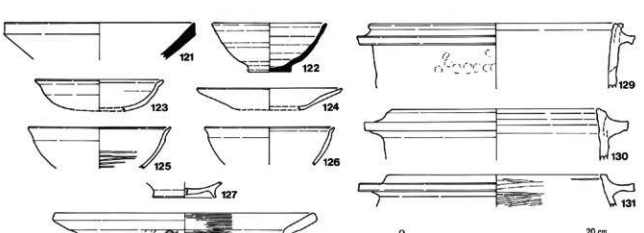
127は黒色土器A類埦の底部片で、断面形が三角形の高台を持つ。内面の調整は磨滅により不明である。高台の内外面はヨコナデ調整である。内面に炭素の吸着が見られる。底径6.6cmである。

128は土師器鍋で大きく開く口縁部と胴の張らない体部を持つ。口縁部外面は磨滅により調整不明だが、内面は体部までよこ方向のハケで調整されている。ハケは9～10本／cmである。体部外面にも8～9本／cmのたてハケが残る。口径27.4cmである。

129は土師器羽釜で口縁端部よりやや下がった位置に、断面形が台形の鍔を貼り付ける。口縁部外面はヨコナデ、体部外面はナデと見られる。内面は磨滅により調整不明である。体部外面下半は被熱により変色している。口径26.6cmである。

130は土師器羽釜で口縁端部よりやや下がった位置に、断面形が台形の鍔を貼り付ける。口縁端部上面は外傾する。外面調整は磨滅の為不明、内面はよこ方向のナデである。口径21.6cmである。

131は土師器羽釜で口縁端部より下がった位置に、断面形が長方形の鍔を貼り付ける。前二者と比較し拡がる体部を持つ。外面調整は磨滅の為不明であ



第29図　包含層等出土遺物実測図

る。内面は5本／cmのヨコハケで、口縁部のみヨコナデを加える。外面鍔以下に煤が付着する。口径22.2cmである。

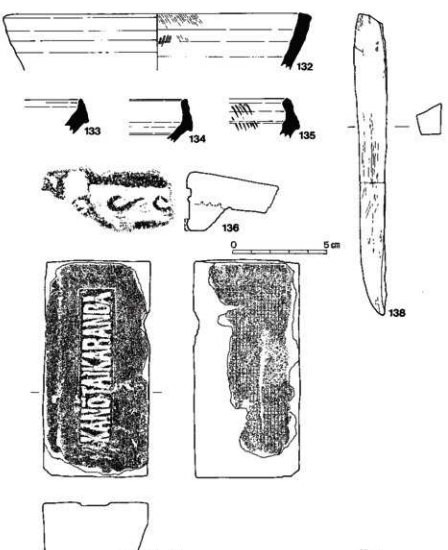
4．その他の遺物（第30図）

132～138は明確な遺構に伴わない中世～近代の出土遺物である。

132は備前焼の擂鉢である。口縁端部の断面形は方形を呈し、肥厚などは見られない。内外面をロクロナデし、内面にわずかに擂り目が残る。口径30.2cmである。14世紀後半のものと考えられる。

133は備前焼の擂鉢である。口縁端部を上方に拡張する。内外面をロクロナデし、内面にごくわずかに擂り目が見られる。15世紀後半のものと考えられる。

134は備前焼の擂鉢である。口縁端部を上方に大きく拡張する。内外面をロクロナデする。内面に擂り目がわずかに残る。16世紀前半のものと考えられる。内外面に自然釉がかかる。



第30図　旧耕土層等出土遺物実測図

135は備前焼の擂鉢である。口縁端部を上方に大きく拡張する。内外面をロクロナデする。内面に櫛描きの擂り目が残る。口縁部外面に凹線は見られない。16世紀後半のものと考えられる。

136は中世の軒平瓦である。成形は顎貼付けによる。瓦当に唐草文の一部が残る。16世紀代と思われるが明確ではない。

137は耐火煉瓦である。上面に「KANOTAIKARANGA」とあり「RE」が「RA」となっている。下面は細かい格子模様である。長さ22.9cm、幅11.2cm、厚さ6.2cmである。

138は砥石である。粘板岩系の石材で、断面形は台形を呈する。2面に使用痕が見られるが、他の2面は割れている。長さ15.9cmである。

Ⅴ．文化財科学による調査

1．大橋町東遺跡第５次調査出土の曲物に使用された樹種

第５次調査第１遺構面の井戸（５-SE102）の底には、水溜に転用された曲物が１点設置されていた。曲物は丸く曲げられた側板を樺皮で綴じ、１枚の帯板で締められていた。底板は存在せず、目釘も認められなかった。この曲物に使用された樹種について、同定を実施した。

（方　法）

側板および帯板それぞれに少量採取したサンプルについて、木口・柾目・板目の３方向断面の薄片プレパラートを作製した。薄片の採取はステンレス製剃刀を用いたハンドセクション法により行ない、ガムクロラールで包埋しプレパラートをそれぞれ作製した。検鏡は生物顕微鏡を用い透過光により観察した。

（結　果）

側板、帯板いずれもヒノキであると判明した。ヒノキは通直な材で加工性が良く、板として通有の材である。また耐朽性、耐湿性にも富むことから、曲物としての用材選択は多く見られ、本例においても首肯できる結果と言える。

以下に同定根拠を記述する。

ヒノキ　*Chamaecyparis obtuse* Endl. CUPRESSACEAE.　ヒノキ科

写真１は繊維方向断面（木口面）である。画面上では３年輪分が観察できる。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。

写真２は放射方向断面（柾目面）である。中央付近に放射組織が横走する。上下に放射仮道管は認められず、８段の放射柔細胞で構成される。早材部仮道管との交差点に存在する分野壁孔は孔口が孔縁より狭い楕円形を呈するヒノキ型である。

写真３は接線方向断面（板目面）である。縦走する仮道管に混じり、単列で５～18段の放射組織が点在する。仮道管内のらせん肥厚は認められない。

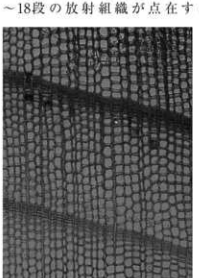


写真1　帯板材繊維断面（50倍）

写真2　帯板材放射断面（200倍）

写真3　側板材繊維断面（50倍）

第31図　曲物材断面顕微鏡写真

2．大橋町東遺跡第５次調査に伴う古環境分析作業業務報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、大橋町東遺跡第５次調査区で検出された12世紀の井戸跡の堆積物を対象として、基盤堆積物および機能期から埋め戻し期までの古環境や堆積物の成因に関する情報を得ることを目的として、珪藻分析、花粉分析を実施する。

１．試料

試料は、5-SE102（井戸）の断ち割り断面の４層、７層、11層から発掘調査担当者により、柱状試料（層厚10㎝）として採取されている。各試料の層相観察を行った後、分析層準を検討した（第32図）。

４層試料は、上部は褐色炭混じり泥質砂の偽礫、腐植質泥質砂の偽礫、黄灰色を呈する泥質砂の偽礫からなる。人為的営力により形成された埋め戻しの堆積物と推定される。試料は腐植質泥質砂より採取した。

７層試料は、細粒砂、泥質細粒砂を挟在する暗灰色を呈する有機質泥からなる。下部の砂層は淘汰が良く、水理的に淘汰されている。上部の砂質泥は淘汰不良であり、周囲からの落ち込み堆積物とみられる。有機質泥は機能期から放置期に堆積した堆積物とみられる。分析試料は有機質泥から採取した。

11層試料は井戸が構築されている基盤堆積物に相当し、細礫粗粒砂混じり砂礫からなる。礫は中礫も混じる。上部は中粒砂～粗粒砂が混じる泥質砂からなる。分析試料は上部の泥質な層準から採取した。

２．分析方法

（１）珪藻分析

湿重約３gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を４～５回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

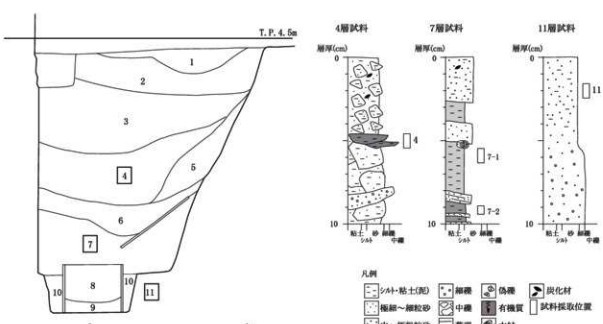
検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が検出できた後は、示準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努めた。

珪藻の同定と種の生態性については、Horst Lange-Bertalot（2000）、Hustedt（1930-1966）、Krammer&Lange-Bertalot（1985～1991）、Desikachiary（1987）などを参考にする。結果は、生態分類も含め、同定・計数結果の一覧表として表示する。

（2）花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25㎜の篩による篩別、重液（臭化亜鉛,比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman（1952, 1957）、Faegri and Iversen（1989）などの花粉形態に関する文献や、島倉（1973）、中村（1980）、藤木・小澤（2007）等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表と花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。



第32図　5-SE102断面図および分析試料採取位置

3．結果

（1）珪藻分析

結果は、表1に示した。4層、7層-2、11層のうち、4層と7層-2からは極低率に珪藻化石が検出された。

表1．珪藻分析結果

種類	生態性 塩分	pH	流水	環境指標種	試料名 4	7-2	11
Craticula spp.	Ogh-ind	al-il	ind		1	1	-
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	2	3	-
Luticola mutica (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	1	-	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-
海水生種					0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0
汽水生種					0	0	0
淡水～汽水生種					0	0	0
淡水生種					6	5	0
珪藻化石総数					6	5	0

凡例

Salinity:塩分濃度に対する適応性
Euh　:海水生種
Euh-Meh:海水生種-汽水生種
Meh　:汽水生種
Ogh-Meh:淡水生種-汽水生種
Ogh-hil:貧塩好塩性種
Ogh-ind:貧塩不定性種
Ogh-hob:貧塩嫌塩性種

pH:水素イオン濃度に対する適応性
al-bi:真アルカリ性種
al-il:好アルカリ性種
ind　:pH不定性種
ac-il:好酸性種
ac-bi:真酸性種
unk　:pH不明種

Current:流水に対する適応性
l-bi:真止水性種
l-ph:好止水性種
ind :流水不定性種
r-ph:好流水性種
r-bi:真流水性種
unk :流水不明種

環境指標種

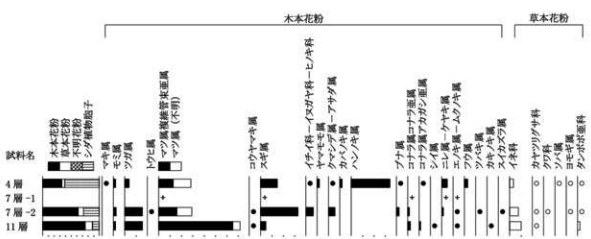
S:好汚濁性種　U:広適応性種　T:好清水性種（以上はAsai & Watanabe,1995）
R:陸生珪藻（RA:A群，RB:B群，RI:未区分，伊藤・堀内,1991）

認められた珪藻化石の保存状態は、すべて半壊して破片状であるだけでなく、溶解の痕跡が認められることから、状態としては非常に悪い。11層は無化石である。検出された分類群は、すべて淡水生種である。

（2）花粉分析

結果を第33図、表2に示す。分析残渣はいずれも少なく10μl以下で、ほぼすべての残渣を検鏡、計数している。花粉の保存状をみると4層は非常に悪いが、7層-2や11層は良いものが多い。ただし、堆積物の時代が新しいことから、時代性を考慮すると7層-2や11層の保存状態は普通といえる。7層-1は花粉化石がほとんど検出されない。

11層は、木本花粉の割合が高い。木本類ではマツ属（特に複維管束亜属）の割合が高く、ツガ属、スギ属を含む。草本花粉ではイネ科が多い。イネ科の中には、量は少ないが大型のイネ科花粉（70μm程度）が含まれる。



第33図　花粉化石群集ダイヤグラム

7層-2は、木本花粉の割合が高い。スギ属とマツ属が多く、ツガ属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科を含む。草本花粉はイネ科が多い。

4層は、マツ属、スギ属、ハンノキ属が多くみられるが、保存状態は悪い。草本花粉は少ないが、栽培種であるソバ属がみられる。全体的にはシダ類胞子が多い。

表2．花粉分析結果

種類	試料名			
	4	7-1	7-2	11
木本花粉				
マキ属	1	-	-	-
モミ属	2	-	5	4
ツガ属	4	-	33	34
トウヒ属	-	-	1	-
マツ属複維管束亜属	13	-	34	142
マツ属（不明）	16	1	28	14
コウヤマキ属	-	-	1	1
スギ属	15	2	70	10
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	1	-	14	-
ヤマモモ属	2	-	-	-
クマシデ属－アサダ属	1	-	12	-
カバノキ属	2	-	-	-
ハンノキ属	35	-	-	-
ブナ属	1	-	5	-
コナラ属コナラ亜属	-	3	3	5
コナラ属アカガシ亜属	1	-	-	3
シイ属	-	-	-	1
ニレ属－ケヤキ属	5	1	3	-
エノキ属－ムクノキ属	-	1	1	2
フウ属	3	-	-	-
ツバキ属	-	-	1	-
カキノキ属	-	-	-	1
スイカズラ属	-	-	1	-
草本花粉				
イネ科	10	-	26	29
カヤツリグサ科	1	-	2	1
クワ科	-	-	1	-
ソバ属	1	-	-	-
ヨモギ属	1	-	2	-
タンポポ亜科	1	-	1	6
不明花粉				
不明花粉	1	-	-	2
シダ植物胞子				
他のシダ植物胞子	182	2	94	34
合　計				
木本花粉	102	8	212	217
草本花粉	14	0	32	36
不明花粉	1	0	0	2
シダ植物胞子	182	2	94	34
合計（不明を除く）	298	10	338	287

4．考察

珪藻化石は4層と7層-2から産出するが、堆積物中の絶対量が少なく、産出個体数は2試料とも10個体未満である。少ないながら産出した種群は、淡水生種の*Craticula* spp.、*Cymbella* spp.、*Hantzschia amphioxys*、*Luticora mutica*、*Pinnularia* spp.である。珪藻化石の産出率が特に低いために、無理に堆積環境を推定するのは危険と考えられるが、若干の考察を行うと以下のように考えられる。

4層と7層-2から低率に検出された種群は、湿地性と思われる種と陸生珪藻である。陸生珪藻とは、水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群（小杉、1986）である。特に、本分析試料から産出した陸生珪藻は、離水した場所の中で乾燥に耐えうることのできる群集とされる（伊藤・堀内、1989；1991）。また、堆積物の分析を行った際、これらの種群が優占（70～80％以上）する結果が得られれば、その試料が堆積した場所は、水域以外の空気に曝されて乾いた環境であったことが推定できるとしている。

産出層準のうち、7層-2は井戸の底の機能期ないし放置期の堆積物と考えられる。珪藻分析の結果から推定される環境は、好気的な環境を示唆していることから、井戸が機能していた時期に周囲の地表の土壌が落ち込んでいる可能性がある。一方、4層については好気的環境で形成された堆積物が利用されていることを示唆する。

井戸機能期ないし放置期の7層の花粉化石群集は、マツ属やスギ属が多産する。これらは風媒花であるため花粉生産量が膨大で、飛散能力にも優れていることから実際の周辺植生は花粉化石の割合ほど多くなかったと思われる。マツ属の増加は周辺の植生破壊による二次林化や植林、スギ属の増加は植林によるもので、これらは中世以降に増加することが多い。今回の井戸が12世紀であることから既存の分析結果とも同調的な結果といえる。なお、マツやスギは樹形が美しく、成長が早いため、植林されることも多いことから、植栽されていた可能性もある。また、イチイ科―ヒノキ科―ヒノキ科も有用材であり、普通に自生するが、植林の可能性もある。草本花粉は、イネ科が多く、ヨモギ属やタンポポ亜科など開けた場所を好む種類が多い。調査地点は遺構構築により人為的影響を強く受けていることから、基本的には草地であり、これら人里植物（いわゆる雑草）が生育していたとみられる。

埋め戻し期の堆積物中の花粉化石群集は、マツ属やスギ属が多産する点で7層の群集に類似するが、ハンノキ属や、クマシデ属―アサダ属、ニレ属―ケヤキ属、エノキ属―ムクノキ属等の産出率が高い点で異なっている。ハンノキ属や、クマシデ属―アサダ属、ニレ属―ケヤキ属、エノキ属―ムクノキ属は成長が早く、萌芽による更新が容易など傷害に強く、河畔林などの構成要素でもある。これらの花粉化石は井戸が埋没する際に混入した可能性もあ

るが、埋め戻し時に利用された堆積物にもともと取り込まれていた花粉化石群の可能性がある。また、4層と7層を比べると、4層は花粉化石の保存状態が悪い。花粉化石は好気的環境下における分解に弱いことから、7層に比べて好気的環境下におかれていた（地下水面の上に相当する等）可能性がある。

一方、遺構の基盤をなす堆積物である11層の花粉化石群集はマツ属の優占が特徴である。六甲山地では、中世以降植生破壊が進みマツ林になったと考えられている（松下, 1992）。11層の形成年代については不明であるが、これに比定される可能性はある。今後11層の形成年代に関する情報を踏まえた評価が必要である。

11層の花粉化石群集は、堆積物の層相および分析残渣が非常に少なく、花粉化石量が少ないことから（概算で1 ccあたり10～30個程度）、異地性の群集で後背の広い範囲の植生を反映していると考えられる。推定される植生は、何らかの植生撹乱によりマツ属を主体とする二次林である。また、調査地点近辺にはイネ科やキク科などの草地も存在した可能性がある。なお、産出するイネ科花粉化石には60 μmほどある大型のものが確認された。表面模様がはっきり観察できないため詳細は不明だが、大型のイネ科花粉化石は、コムギ、ジュズダマ、ハトムギ、トウモロコシなどの栽培種を含むことから（藤, 1987など）。これらいずれかの栽培種に由来する可能性もある。今回は検出数が少なく（3～4個程度）、かつ表面模様がはっきり観察できる個体がなかったが、保存が良ければ、表面観察を行い、中村（1980）等との比較することによって、種類の絞り込みができると考えられる。

引用文献

Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,35-47.

Desikachiary, T. V., 1987, Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at TT. Maps & Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. 1-13, Plates : 401-621.

Erdtman G.,1952,Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms (An introduction to palynology. 1) .Almqvist&Wiksells,539p.

Erdtman G.,1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteriodophyta, Bryophyta (Illustrations) (An Introduction to Palynology. II) .147p.

Feagri K. and Iversen Johs.,1989,Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press,328p.

藤木利之・小澤智生, 2007, 琉球列島産植物花粉図鑑. アクアコーラル企画, 155p.

藤　則雄, 1987, 考古花粉学. 雄山閣, 251p.

Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.

Hustedt, F., 1937-1938, Systematische unt okologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Ⅰ ～ Ⅲ. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809p, 1-155p, 274-349p.

Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.

Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.

伊藤良永・堀内誠示, 1989, 古環境解析からみた陸生珪藻の検討 －陸生珪藻の細分－. 日本珪藻学会第10回大会講演要旨集, 17.

伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 日本珪藻学誌, 6, 23-44.

小杉正人, 1986, 陸生珪藻による古環境の解析とその意義－わが国への導入とその展望－. 植生史研究, 1, 9-44.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, Naviculaceae. Bibliothyca Diatomologica, vol. 9, p. 250. Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2 (1) : 876p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2 (2) : 596p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2 (3) : 576p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2 (4) : 437p.

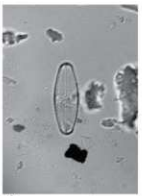
Lowe, R. L., 1974, Environmental requirements and pollution tolerance of fresh-water daitoms. In Environmental Monitaing Ser. EPA-670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center office of Res. Develop. U. S. Environ. Protect. Agency. cincinati. 1-344.

松下まり子, 1992, 六甲山系の変遷,「六甲山の植物」, 神戸新聞総合出版センター, 168-177.

中村　純, 1980, 日本産花粉の標徴　Ⅰ　Ⅱ (図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第12, 13集, 91p.

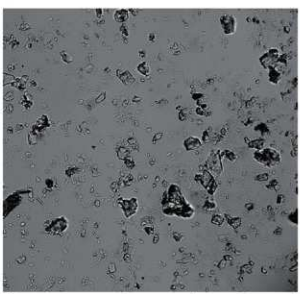
島倉巳三郎, 1973, 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第５集, 60p.

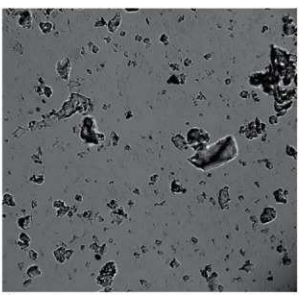
1
10 μ m

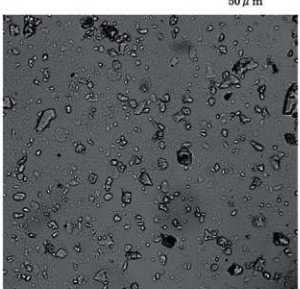

2
10 μ m

3
10 μ m

4
10 μ m

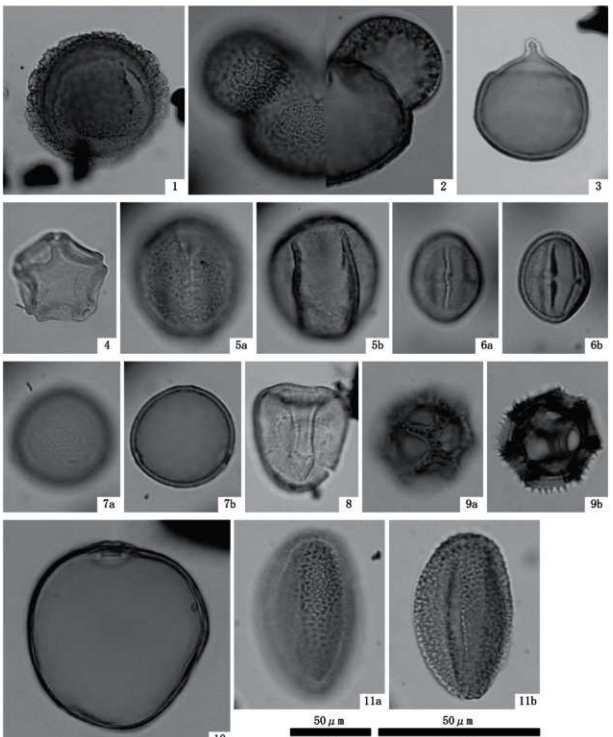

5
50 μ m


6
50 μ m


7
50 μ m

1.*Hantzschia amphioxys*(Ehr.) Grunow (土層⑦-2 SE102)
2.*Luticola mutica* (Kuetz.)D.G.Mann (土層⑦-2 SE102)
3.*Pinnularia* spp. (土層⑦-2 SE102)
4.*Pinnularia* spp. (土層⑦-2 SE102)
5.プレパラート状況 (土層④SE102)
6.プレパラート状況 (土層⑦-2 SE102)
7.プレパラート状況 (土層⑪)

第34図 珪藻化石写真



1．ツガ属(11層)
2．マツ属複維管束亜属(11層)
3．スギ属(4層)
4．ハンノキ属(4層)
5．コナラ亜属(11層)
6．アカガシ亜属(11層)
7．エノキ属―ムクノキ属(11層)
8．カヤツリグサ科(11層)
9．タンポポ亜科(11層)
10．イネ科(11層)
11．ソバ属(4層)

第35図　花粉化石写真

Ⅵ．まとめ

今回の調査地では、基本的に上下２面の遺構面が確認された。ただ、自然地形に影響され北辺に近づくに従い削平を被り、上下２面が同一面で検出される範囲が多くなる。調査対象地のほぼ中央、第５次調査区での第１面の検出レベルは標高4.4m～4.5m、第２面は標高4.2m～4.3mである。第１遺構面上に厚さ約10㎝の上層遺物包含層が堆積し、第１遺構面のベース土、厚さ約20㎝が下層の遺物包含層となっている。

縄文時代から弥生時代の遺構・遺物に関しては、量的には恵まれず、かつ遺構の分布も散在的であった。ただし弥生時代後期の竪穴建物をはじめ当該時期に関する資料が得られた事は重要で、当時の集落の一端を明らかにすることができたものと考えられる。

古墳時代後期を中心とする時期の竪穴建物およびそれと推定できる遺構を検出したことは、近接する松野遺跡との関係で注目される。松野遺跡では既述したように、豪族居館と推定される柵列で区画された遺構と、その南に多くの竪穴建物が分布する集落景観が復元される。今回大橋町東遺跡でほぼこれらと同時期の竪穴建物が検出されたことは、当時の集落構成をより鮮明化する資料として重視されるものと考えられる。

平安時代のものと考えられる耕作溝から推定復元される条里状の地割に関しては、第１遺構面検出の現街路と平行する耕作溝と、これ以前で第１遺構面の耕作溝の方向とは異なる第２遺構面のものを確認した。両者の条里状の地割の施工時期については溝からの出土遺物が小片かつ様々な時期のものを含んでおり確定がしがたい。しかし第１遺構面に関しては、５-SP103はこの溝を切って作られており、また５-SE102もこの溝の埋没後の構築であることが確認できる。よって５-SP103出土遺物から10世紀以前、あるいは遅くとも５-SE102埋没前の11世紀後半頃～12世紀前半以前には施工されていたものと思われる。

座標南北方向に近い第２遺構面の耕作溝はこれとは方位が全く異なるが出土遺物がごく少量で時期を決定することが現在できない。西に接する大橋町遺跡でも同じく耕作溝を検出しており、座標南北方向に近いものの時期を飛鳥時代と推定するが、周辺遺跡での類似遺構に関して所属時期等を含めて、更なる検討が必要と思われる。

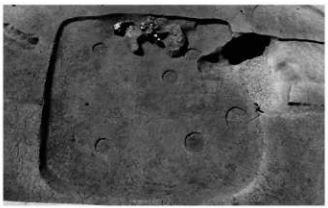
写真図版

第１次調査区北半、第１遺構面（南から）

同上南半、第２遺構面（北から）

同左北半、第２遺構面（南から）

同上、SB02（南から）



同上、SB01（南から）

同上、SB02内土坑（西から）

同上、竈（南から）

図版２

第２次調査区、第１遺構面（南から）

同上、第１遺構面（東から）

同左、SE01（東から）

同上、第２遺構面（東から）

同上、SK201（西から）

第３次調査区、第１遺構面（東から）

同上、第２遺構面（北から）

図版４

第４−１次調査区（南から）

同上、（西から）

同上、南西部（東から）

第４−２次調査区、第１遺構面（東から）

同左、第２遺構面（東から）

同上、SP201（東から）

同上、NR201（西から）

同上、SE201（東から）

図版６

第４－３次調査区、第１遺構面（西から）

第４－３次調査区、第２遺構面（西から）

同上、SK101（南から）

第５次調査区南半、第１遺構面（西から）

同左北半、第１遺構面（西から）

同上南半、第２遺構面（西から）

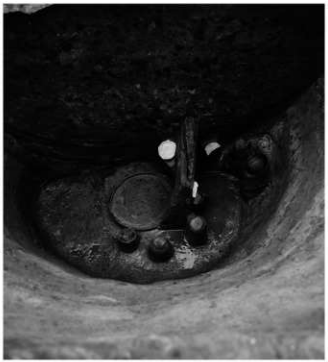
同上北半、第２遺構面（西から）

同上、SE101（北から）

同左、水溜転用曲物（北から）

図版８

第５次調査区、SE102（北から）

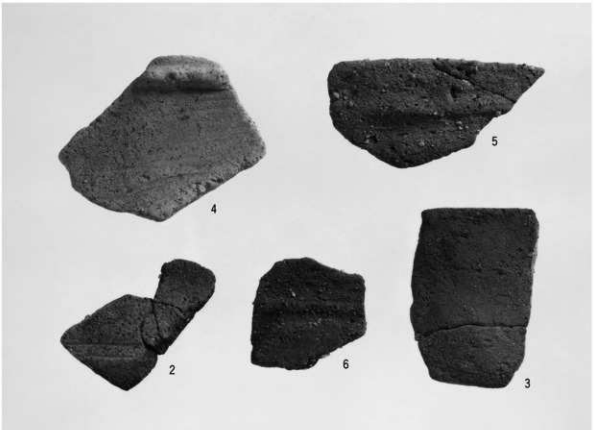


同左、遺物出土状態（北から）

同上、水溜転用曲物（東から）

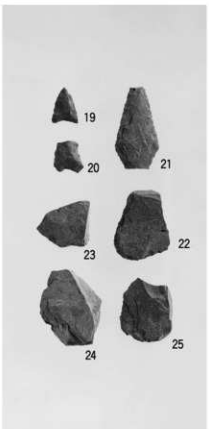
第６次調査区、第１遺構面（南から）

同左、第２遺構面（南から）



縄文土器

4－2－SP201出土土器



サヌカイト製石器類

図版10

1 -SP21出土土器

1 -SB01出土遺物

2-SK201出土須恵器

2-SK201出土土師器甕

4-2-耕作溝出土滑石製紡錘車

4-3-SK101出土須恵器埦

同左、出土土師器埦

図版12

1 -SP03出土須恵器埦

2 -SE101出土黒色土器埦

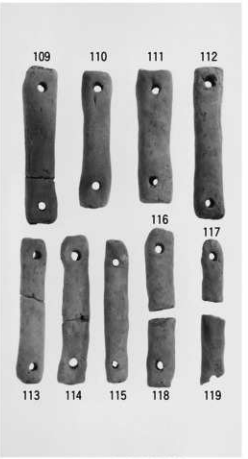
93～104：5-SE102出土瓦器類

105：同左、出土土師器小皿

5-SE102出土遺物

図版14

5-SE102出土水溜転用曲物



5-SP112出土棒状土錘

耐火煉瓦

5-SD202出土飯蛸壺

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおはしちょうひがしいせきだい1じ～だい6じはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	大橋町東遺跡第１次～第６次発掘調査報告書
副 書 名	
編著者名	黒田恭正（編）・内藤俊哉・池田毅・阿部功・西岡巧次・谷正俊・須藤宏・中谷正・佐藤麻子・石島三和・中村大介
編 集 機 関	神戸市教育委員会
所 在 地	〒650-8570　神戸市中央区加納町６丁目５番１号 ℡ 078-322-6480
発行年月日	平成27（2015）年３月31日

所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査原因
		市町村	遺跡番号			記録保存調査
大橋町東遺跡	兵庫県神戸市長田区大橋町３丁目	28106	6-34	34° 39′ 24″	135° 8′ 52″	市街地再開発事業に伴う

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大橋町東遺跡	集落跡	縄文時代～平安時代	竪穴建物、井戸、土坑、掘立柱建物、耕作溝	縄文～平安時代の土器類	

大橋町東遺跡

第１次～第６次発掘調査報告書

2015.3.31

発　行　神戸市教育委員会文化財課
〒650-8570　神戸市中央区加納町６丁目５番１号
TEL 078-322-6480

印　刷　デジタルグラフィック株式会社
神戸市中央区弁天町１－１
TEL 078-371-7000

神戸市広報印刷物登録・平成26年度　第342号（広報印刷物規格A-6類）